厚生労働省　令和５年度　慢性疼痛診療システム均てん化等事業

慢性の痛みの理解と診療体制の構築に向けて

【東北ブロック】

報告書

公立大学法人福島県立医科大学医学部
疼痛医学講座

目　次

1.挨拶 …… 福島県立医科大学疼痛医学講座　教授　矢吹　省司　4

2.令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業　ホームページのご紹介 …… 6

3.地域の活動報告

Ⅰ.青森県 …… 八戸市立市民病院　第一整形外科部長兼リハビリテーション科部長　沼沢　拓也　8
「青森地区における慢性疼痛診療講習会ならびに研修会を開催して」

Ⅱ.岩手県 …… 岩手医科大学医学部麻酔科学講座　准教授　大畑　光彦　13
「令和5年度　活動報告　岩手県」

Ⅲ.秋田県 …… 秋田大学医学部附属病院　麻酔科　木村　哲／山本　夏子　15
「令和5年度　活動報告　秋田県」

Ⅳ.宮城県
[宮城・仙台ペインクリニック]
「仙台痛みのフォーラム　多診療科・多職種による地域の痛みの勉強会」
…… 仙台ペインクリニック　伊達　久　16
「慢性疼痛診療研修会 活動報告～ベーシックコース・アドバンスコース～」
…… 仙台ペインクリニック　リハビリテーション科　理学療法士　大友　篤　19
[宮城・東北大学／麻酔科]
「第3回がんサバイバーの痛みを考える会」
「遺体を用いた神経ブロックセミナー」…… 東北大学病院麻酔科　山内　正憲　21
「慢性疼痛診療研修会・講習会受講効果のアンケート調査」… 東北大学病院麻酔科　鈴木　潤　23
…… 東北大学予防歯科学分野　笹井　真澄
東北大学病院麻酔科　山内　正憲
[宮城・東北大学／歯科] …… 東北大学大学院歯学研究科　歯科口腔麻酔学分野　水田健太郎　26
「歯科医師のための慢性疼痛診療講習会・研修会報告」
[宮城・東北医科薬科大学] …… 東北医科薬科大学医学部　整形外科学　教授　小澤　浩司　28
「令和5年度厚生労働省慢性疼痛診療システム均てん化等事業活動報告」

Ⅴ.山形県
「令和5年度活動報告」…… 山形大学医学部整形外科学講座　助教　鈴木　智人　29
「星総合病院慢性疼痛センター見学」 …… 山形大学医学部附属病院　疼痛緩和内科　飯澤　和恵　30
「山形大学附属病院における慢性疼痛診療の取り組みについて」
…… 山形大学医学部慢性疼痛緩和内科　東北文教大学人間科学部　小林なぎさ　31

Ⅵ.福島県
「令和5年度慢性疼痛センターでの就労支援の取り組み」
…… 福島県立医科大学医学部疼痛医学講座　教授　星総合病院慢性疼痛センター　副センター長　髙橋　直人　32
「慢性疼痛診療研修会　報告」…… 星総合病院　慢性疼痛センター　二瓶　健司　34

Ⅶ.リハビリテーション職種による合同企画
[令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業 東北ブロック　福島県・宮城県合同企画]
「リハビリテーション専門職のための慢性疼痛評価研修会」
…… 福島県コーディネーター 理学療法士　二瓶　健司　38
宮城県コーディネーター 理学療法士　大友　篤

4.学会発表等 …… 40

5.編集後記 …… 福島県立医科大学疼痛医学講座　教授　矢吹　省司　47

［挨　拶］

令和５年度
慢性疼痛診療システム均てん化等
事業について

福島県立医科大学　疼痛医学講座
教授　矢吹省司

「令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業」は全国8地区で行われています。この事業は、診療システムの構築・均てん化を行う、また人材育成を行うという2大の柱で成り立っています(図1)。

まず、システム構築・均てん化については、東北には現在「福島県立医科大学」、「星総合病院」、「仙台ペインクリニック」の3つの痛みセンターがあります。この痛みセンターを中心とした、あるいは各県の連携施設を中心とした診療ネットワークを構築し、東北地区における痛み診療システムを均てん化することが一つの大きな柱となっています。

もう一つの柱が人材育成です。研修会や講演会あるいは見学、出前講演会などを行って人材育成をしようというものです。年度当初はコロナ禍の中で、痛みセンターの研修や見学ができていない状況がありました。出前講演会などもなかなか実現できておりませんでした。しかし、年度後半には、対面で行える状況になってきたのは嬉しい変化でした。

今年度も昨年度に引き続き東北地区の各県幹事・協力者にお力添えを頂き、県毎に慢性疼痛診療についての企画を立案・実施していただきました。その結果、より地域に根差した講義、ディスカッションが可能となり、地域連携が進んだのではないかと思っております。まずは地域ごとに慢性疼痛に関する知識の普及、教育を進め、東北全体としてのレベル向上と連携を目指して行きたいと考えています。

この報告書は、1年間東北で行ってきたモデル事業の全体像がわかるようになっています。最後まで読んでいただき、本慢性疼痛診療システム均てん化等事業に参加された皆様には学んだ知識を思い出していただきたいと思います。また、参加されなかった皆様には慢性疼痛診療に興味を持っていただくきっかけになれば幸いです。

今後とも本慢性疼痛診療システム均てん化等事業へのご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

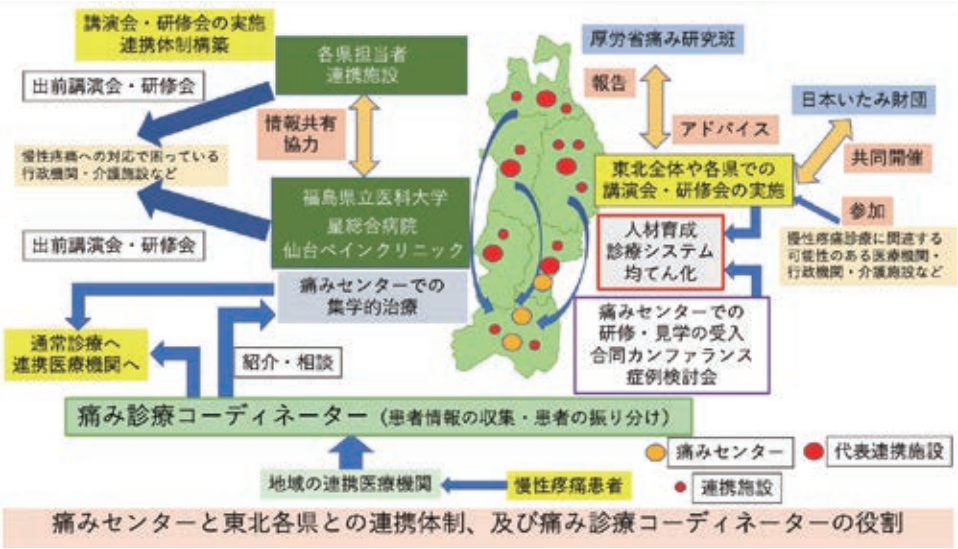


図1　令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業構想

令和5年度　慢性疼痛診療システム均てん化等事業　東北地区各県代表幹事及び協力者

青森県	八戸市立市民病院	整形外科 リハビリテーション科	医師	沼沢　拓也
		コーディネーター	理学療法士	石村　慶太
			理学療法士	盛島　幾子
			理学療法士	風穴　愛貴
岩手県	岩手医科大学	麻酔科	医師	大畑　光彦
宮城県	仙台ペインクリニック	麻酔科	医師	伊達　久
		コーディネーター	理学療法士	大友　篤
			薬剤師	塩津　由美
	東北医科薬科大学	整形外科学	医師	小澤　浩司
	東北大学	麻酔科	医師	山内　正憲
		大学院歯学研究科	医師（歯科）	佐々木啓一
			医師（歯科）	水田健太郎
秋田県	秋田大学	麻酔蘇生疼痛管理学講座	医師	新山　幸俊
			医師	木村　哲
			医師	山本　夏子
山形県	山形大学	整形外科学講座	医師	鈴木　智人
		山形大学医学部附属病院 疼痛緩和内科	医師	飯澤　和恵
	山形大学 東北文教大学	疼痛緩和内科 人間科学部 子ども教育学科	公認心理師 専任講師	小林（三道）なぎさ
福島県	福島県立医科大学	整形外科学講座 疼痛医学講座	医師	矢吹　省司
		整形外科学講座	医師	二階堂琢也
	星総合病院	整形外科 慢性疼痛センター	医師	髙橋　直人
		コーディネーター	理学療法士	二瓶　健司
			看護師	本　幸枝

（※敬称略）

令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業　ホームページのご紹介

厚生労働省　慢性疼痛診療システム均てん化等事業【東北ブロック】ではホームページを公開しています。

均てん化等事業についての説明や、東北地区で企画している研修会・講演会のご案内を掲載しています。ぜひご覧くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

公開URL　https://toutsuu-toru.net/

検索ワード
- 均てん化等事業　東北
- 慢性疼痛　東北
- 疼痛診療　東北
- 疼痛患者　東北

地域の活動報告

Ⅰ.青森県

Ⅱ.岩手県

Ⅲ.秋田県

Ⅳ.宮城県

［仙台ペインクリニック］

［東北大学／麻酔科］

［東北大学／歯科］

［東北医科薬科大学］

Ⅴ.山形県

Ⅵ.福島県

Ⅶ.リハビリテーション職種による合同企画

〔青森〕

青森地区における慢性疼痛診療講習会ならびに研修会を開催して

八戸市立市民病院
第一整形外科部長兼リハビリテーション科部長　沼沢　拓也

慢性疼痛診療システム普及・人材モデル事業に参加し5年目となる今年度は、厚労省慢性疼痛診療システム均てん化等事業に名前が変更し、従来の地域における疼痛センターを中心とした集学的診療のほかに、それぞれの地域でもより実践的に診療していける体制の構築が求められました。

今年度、青森県では慢性疼痛診療に関わる講演会を3回開催し、また研修会を2回開催しました。講演会については2023年10月から11月にかけて、慢性疼痛に関わる全職種に対してオンラインでの開催としました。第1回は「多科診療連携のための慢性疼痛診療講演会」として整形外科医と麻酔科医から慢性疼痛診療の考え方や多職種連携についてお話しや薬物療法についてのお話しを頂き、参加者は26名でした。第2回は「リハビリテーションを中心とした慢性疼痛診療講演会」として、2名の理学療法士の先生から慢性疼痛患者に対する具体的なリハビリテーションの進め方と慢性腰痛患者に行っている実際の治療についてお話しいただき、参加者は45名でした。第3回は「心理療法を中心とした慢性疼痛診療講演会」として精神科医および臨床心理士の方から、精神科から見た慢性疼痛の考え方や臨床心理士からみた慢性疼痛に対する心理療法について講演いただき、参加者は29名でした。講演会実施後にはアンケート調査をさせていただき、参加者から積極的な研修会参加の希望を確認することができました。

研修会については2024年1月に対面式の研修会を開催しました。対象者を医師とリハビリ職種に限定し、慢性疼痛診療に対しそれぞれの職種間における相互の理解を深めることを目的とし、また地域で一緒に診療している人を知るために対面式研修会を選択させていただきました。募集定員満員の30名（医師5名、リハビリ技師25名）に参加いただき、6つのグループに分かれて講義の聴講とディスカッションを積極的に行ってもらいました。研修会実施後のアンケート調査では、すべての参加者から慢性疼痛診療の地域連携に協力したいとの返答を頂き、今回のような研修会など地域で交流できる機会が必要であることを実感しました。また2024年2月にはいたみ財団主催のオンラインでの研修会を開催しました。こちらは定員30名に対し20名の申し込みがあり、当日は1名の欠席者が出ましたが19名の方に研修してもらいました。多くの方から研修会で学ぶことが多かったとの意見を頂くことができて安心しております。青森県では今までいたみマネージャー資格を取るための研修会を実施してこなかったため、今回の研修でマネージャー資格に興味を持ち、資格取得を目指してくれる方がいればと思っております。

八戸地域ではこのほかに「八戸ペインミーティング」を2023年6月にハイブリッドで、11月に対面式で開催しました。6月の会は1時間の特別講演と残り1時間は症例検討会を行い、11月は2時間の対面症例検討会を行いました。整形外科、麻酔科、精神科の医師とリハビリ職種、臨床心理士が参加して、難治な慢性疼痛症例に対して様々な方面から意見を出し合い、どのようにアプローチして治療していくかをみんなで話し合い考えました。このような多職種、多診療科の連携を継続していくことが、地方地域においてより高いレベルでの慢性疼痛診療につながると思っております。慢性疼痛診療システムの均てん化に向けて、今後も地方でこのような連携しながらの活動は継続したいと思っております。

青森地区慢性疼痛診療講演会

会　　場：グランドサンピア八戸配信　WEB開催　　参加対象：青森県内の痛みに関わる全職種

第1回　日時：2023年10月25日（水）時間　18：30 ～ 20：00

第2回　日時：2023年11月1日（水）　時間　18：30 ～ 20：00

第3回　日時：2023年11月8日（水）　時間　18：30 ～ 20：00

2023年10月～11月にかけて3週連続で、オンラインによる慢性疼痛診療講演会を開催しました。第1回は「多科診療連携のための慢性疼痛診療講演会」として参加者は26名でした。第2回は「リハビリテーションを中心とした慢性疼痛診療講演会」として参加者は45名でした。第3回は「心理療法を中心とした慢性疼痛診療講演会」として参加者は29名でした。

今年度も慢性疼痛に関わる多くの方々に、慢性疼痛診療の基礎知識を多方面から説明することを目的とし、青森県内の医療機関の整形外科、麻酔科、リハビリテーション科および介護施設に案内をして参加者を募りました。

講演会の参加者としては医師や理学療法士・作業療法士などのリハビリテーション職種の参加者が多く、看護師や薬剤師などの職種の方の参加が少ない印象でした。また介護職の方の参加はあまりありませんでした。

講演会後の事後アンケートを行い、慢性疼痛診療研修会があった場合の参加希望を伺いましたが、

第1回（n=21　回答率87.5%）

積極的に参加したい38.1%　参加したい61.9%

第2回（n=39　回答率86.7%）

積極的に参加したい46.2%　参加したい51.3%　どちらでもない2.5%

第3回（n=18　回答率62.1%）

積極的に参加したい33.3%　参加したい50%　どちらでもない16.7%

という結果であり、多くの方々が研修会への参加意欲があることを確認できました。

講演会により知識をできるだけ身につけてもらい、実践的にディスカッションを行う研修会を受講させる工夫を行いました。

（八戸市立市民病院整形外科　沼沢　拓也）

医師とリハビリ職種のための慢性疼痛診療研修会

日　　時：2024年1月14日（日）時間　9：00 ～ 12：30　　会　　場：ホテル青森　現地

参加対象：青森県内の医師及びリハビリテーションスタッフ

医師とリハビリテーション職種を対象とした慢性疼痛診療研修会を2024年1月14日に開催しました。

過去の開催は八戸市で行う機会が多く、今年度は場所を青森県の主要都市である青森市にして、現地に集合してもらう対面での研修会を開催しました。30名の定員募集は埋まり、医師5名、理学療法士18名、作業療法士7名の計30名の方に参加いただきました。

研修会は1つのグループ5名の参加者に対し1名のファシリテーターがつく形として、6つのグループに分けてディスカッションをしていただきました。講師には整形外科医と理学療法士、臨床心理士の計4名の先生方に講義をお願いし、そのほか地域で慢性疼痛診療に関わっている理学療法士の先生方2名にファシリテーターの協力をしていただきました。

1つの講義を50－60分と時間を取ることにより、グループディスカッションを多く取り入れ、参加者からは活発な意見が聞かれました。

研修会の後には以下に示す項目毎に4段階アンケート（①満足②やや満足③やや不満④不満）評価を行いました（n=27 回答率90%）。

厚生労働省　令和５年度　慢性疼痛診療システム均てん化事業
東北ブロック研修会（青森地区）

医師とリハビリ職種のための慢性疼痛診療研修会

日　　時：2024 年 1 月 14 日（日）9:00-12:30
開催方法：ホテル青森（青森市）（現地）
対　　象：医師およびリハビリ職種　30 名（現地）
参 加 費：無料

テーマ：慢性疼痛診療を学ぶ

9:00-9:10　開会のあいさつ・アイスブレーク
八戸市立市民病院整形外科　沼沢拓也　先生

9:10-9:50　研修 1　慢性疼痛診療の考え方・進め方
八戸市立市民病院整形外科　沼沢拓也　先生

9:50-10:30　研修 2　慢性疼痛に対する心理療法
柴田学園大学こども発達学科　萩臺美紀　先生

10:30-10:35　休憩

10:35-11:25　研修 3　慢性疼痛に対するリハビリテーションの考え方・進め方
仙台ペインクリニックリハビリテーション科　大友篤　先生

11:25-12:25　研修 4　症例ディスカッション　慢性疼痛患者治療の実際
八戸市立市民病院リハビリテーション科　石村慶太　先生

12:25-12:30　閉会のあいさつ
八戸市立市民病院整形外科　沼沢拓也　先生

参加申し込み方法：以下の参加申し込みフォームよりお申し込みください。QR コードも利用できます。
https://forms.gle/wQ5T7Fu43sYd9Q4
申込期限：2024 年 1 月 10 日（水）
参加申し込み後、別途メールにて詳細をご案内させていただきます。
【問い合わせ先】
八戸市立市民病院リハビリテーション科　石村慶太 /TEL 0178-72-5111 /E-mail：buzz.com.keita@gmail.com
【主　　催】
厚生労働省　慢性疼痛診療システム均てん化事業　東北ブロック / 八戸市立市民病院整形外科・リハビリテーション科

司会進行…… ①満足 85.2%　②やや満足 14.8%　③やや不満 0%　④不満 0%
時間配分…… ①満足 55.6%　②やや満足 40.7%　③やや不満 3.7%　④不満 0%
講義の内容…… ①満足 77.8%　②やや満足 22.2%　③やや不満 0%　④不満 0%
グループディスカッション　①満足 59.3%　②やや満足 40.7%　③やや不満 0%　④不満 0%
ファシリテーター …… ①満足 85.2%　②やや満足 11.1%　③やや不満 3.7%　④不満 0%
研修会全体…… ①満足 85.2%　②やや満足 14.8%　③やや不満 0%　④不満 0%

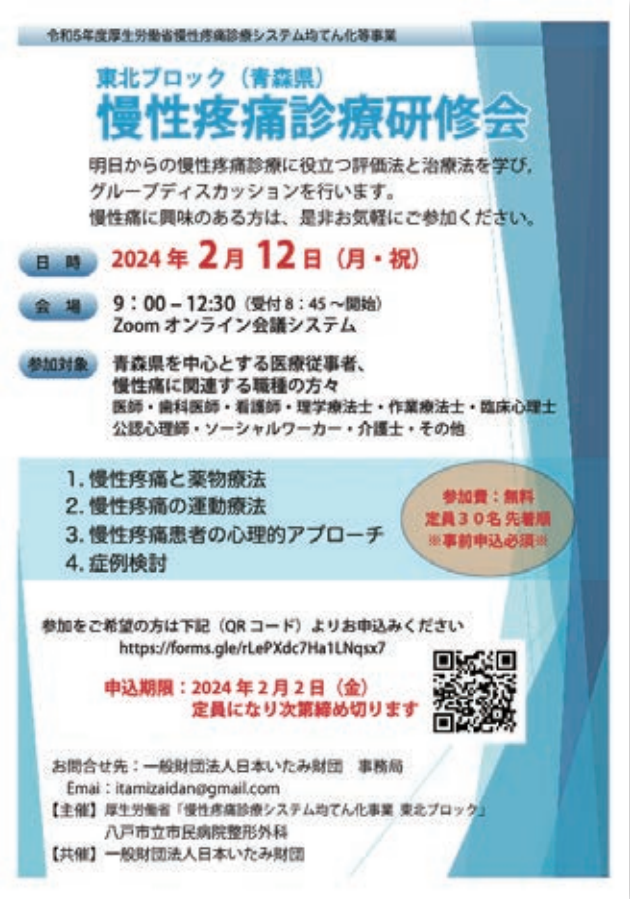
アンケート結果から多くの参加者の方が今回の研修会について満足が得られたことがわかりました。一方でグループディスカッション時間はもう少し必要であると考えられ、研修会を分けてより深く議論する必要性もあるのではないかと考えました。

（八戸市立市民病院整形外科　沼沢　拓也）

慢性疼痛診療研修会

日　　時：2024年2月12日（祝・月）時間　9：00 ～ 12：30　　**開催形式**：オンライン開催

参加対象：青森県内の痛みに関わる全職種



青森県内の痛みに関わる全ての職種の方を対象に、いたみ財団共催のオンラインでの慢性疼痛診療研修会を2024年2月12日に開催しました。

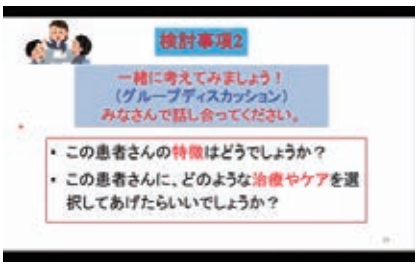
今まで青森県ではいたみ財団共催の研修会を開催したことがありませんでした。しかし、同財団のいたみマネージャー資格やいたみ専門医等の資格取得を目指したい方が周囲におり、地域でより多くの痛み治療の専門職を増やす目的も兼ねて、同財団にお願いして研修会を開催させていただきました。

最終的には20名の参加希望があり、当日は看護師1名が欠席し、医師5名、理学療法士9名、作業療法士5名の19名の方に参加いただきました。

講師の先生方には、東北各県の慢性疼痛を熟知する麻酔科医師、整形外科医師、理学療法士、臨床心理士の先生方に講義およびファシリテーターを担当していただきました。3－4名の5つのグループに分かれてそれぞれ活発なディスカッションが行われました。

参加者からは、グループワークによる研修で色々な方からの意見を聞くことができたことや、直接に話し会う機会が持てたことが良かったとする声が多くありました。一方で、ディスカッション時間の少なさを指摘する声もあり、現地開催の研修会を含めてディスカッション時間を長くする工夫が必要ではないかと感じる部分がありました。いずれにしても、地方地域において慢性疼痛診療に興味を持っている方が多くいることを確認できたことは良い材料ではないかと思っております。

青森県の研修会では前回の研修会と同様にリハビリテーション職種の参加意欲が高いと思われましたが、他の慢性疼痛診療に関わる職種をもっと多く参加させて、より地域で高いレベルの慢性疼痛診療を目指すことが必要であると考えています。



（八戸市立市民病院整形外科　沼沢　拓也）

八戸ペインミーティング

八戸地域で疼痛治療について、多職種でディスカッションする八戸ペインミーティングを今年度は2回開催しました。2018年から整形外科、麻酔科、メンタル科の医師が集い始めたミーティングは、2019年からは医師以外のリハビリテーション技師や臨床心理士も交えて交流しております。

2023年6月8日のミーティングでは、特別講演でも神経障害性疼痛に対する薬物治療のお話しを頂き、ケースディスカッションではテーマを「各領域での痛みへのアプローチ」とし、内科医にも参加発表いただき、参加者でディスカッションする機会を得ました。11月23日のミーティングでは様々な領域で抱える慢性疼痛例の症例検討会として外科医の先生の参加がありました。本事業の目的の1つである慢性疼痛診療の均てん化を目指すべく、地域では多くのいたみに関わっている職種が連携する必要性があり、交流を深めていく場として八戸ペインミーティングの継続的な開催を目指していければと思っております。

第13回　八戸ペインミーティング（ハイブリッド開催）　2023年6月8日（木）　19:00 ～ 21:00

特別講演

演 題 名：Gabapentinoidsによる脊椎由来の疼痛治療

演　　者：福岡みらい病院整形外科　柳澤　義和 先生

ケースディスカッション

演題1　青南病院　理学療法士　藤田　智樹 先生

「難治性慢性疼痛患者への多角的アプローチ」

演題2　青森労災病院　整形外科　部長　岩崎　弘英 先生

「更年期女性の手の痛み」

演題3　八戸平和病院　麻酔科・ペインクリニック　石川　有平 先生

「診断・治療に苦慮している歩行障害を呈する2症例」

演題4　はやし呼吸器・総合内科クリニック　院長　林　　彰仁 先生

「痛みに対する一開業医の試み」

第14回　八戸ペインミーティング（グランドサンピア八戸開催）　2023年11月23日（祝・木）　17:00 ～ 19:00

演 題 名：厚労省慢性疼痛診療システム均てん化等事業について

演　　者：八戸市立市民病院整形外科　沼沢　拓也 先生

ケースディスカッション

「胸背部の慢性痛を訴えた症例」「MOBの慢性疼痛症例」

（八戸市立市民病院整形外科　沼沢　拓也）

〔岩手〕

令和5年度　活動報告　岩手県

岩手医科大学医学部麻酔科学講座
准教授　大畑　光彦

岩手県では、慢性疼痛センター（星総合病院）見学、研修会、シンポジウム（症例検討会）を企画しました。慢性疼痛の知識をさらに広めるために「慢性疼痛診療研修会」を例年と同様に企画、慢性疼痛の知識の修得に伴い、実際にどのように診療において多職種連携を行っていくか具体的モデルを拝見させていただき均てん化をすすめるため慢性疼痛センター（星総合病院）見学を企画、また、シンポジウム「慢性疼痛診療症例検討会」ではより実際的な議論のため症例検討会として企画しました。

令和5年10月、企画案内状を作成、岩手県の慢性疼痛診療に関わる医療機関に送付、研修会、シンポジウムへの参加者を募集しました。参加者の裾野は広がっていると思われますが、啓蒙の継続は必要と考えます。今回のシンポジウムなどで各部門の交流が行われたことなどから、今後連携は円滑になっていくと考えられます。

慢性疼痛センター（星総合病院）の見学には、医師、理学療法士、臨床心理士、看護師の多職種で参加し、実際の施設、設備、外来、病棟を拝見、各職種の概要を説明いただきました。質疑応答にも丁寧にお答えいただき、日常診療で具体化されていないもの、不明瞭であったもの、対応の仕方など、たくさんの方向性を示唆いただけました。入院プログラムや多職種ミーティングにも参加させていただき、非常に有意義な時間となりました。

【1】「慢性疼痛センター（星総合病院）見学」

日　　時：令和5年11月24日　10：00 ～ 18：00
場　　所：星総合病院　慢性疼痛センター（福島県郡山市向河原町159－1　TEL 0249835511）
参 加 者：慢性疼痛診療に関わる医療従事者　5名
　麻酔科医師　大畑光彦　　整形外科医師　鈴木　忠　　理学療法士　坪井宏幸
　臨床心理士　藤原恵真　　看護師　高橋ユミ子
概　　要：10：30－18：00
　11：00－13：00 施設内見学（リハ、病棟など）
　14：00－17：00 外来場面の見学
　17：00－18：00 多職種カンファランス参加

【2】「慢性疼痛診療研修会」

日　　時：令和5年12月3日　9:00 ～ 12:30　　場　　所：Zoomオンライン会議

対　　象：岩手県内の医療従事者

プログラム：1.慢性疼痛とその治療（秋田大学　木村　哲 先生）

2.慢性疼痛の運動療法（仙台ペインクリニック　大友　篤 先生）

3.慢性疼痛患者の心理的アプローチ（東北文教大学　三道　なぎさ 先生）

4.症例検討（八戸市民病院　沼沢　拓也 先生）

一般財団法人日本いたみ財団の共催で行われ、慢性疼痛の知識は薬物治療の講義に含めていただき、その他の治療として運動療法、心理療法について講義いただきました。講義ごとにディスカッションの時間を設け、参加者を5グループとして討論いただきました。今年度は治療に焦点をあてた研修会としました。これらの知識をふまえ、症例検討では、討論しながら具体的に治療をシミュレーションできたのではないかと考えます。

職種	参加者数
医師	8名
薬剤師	1名
看護師	4名
理学療法士	4名
臨床心理士	1名

【3】シンポジウム「慢性疼痛症例検討会」

日　　時：令和6年1月13日　10:30 ～ 13:00　　場　　所：Zoomオンライン会議

対　　象：東北6県の医療従事者

プログラム：座長　大畑　光彦（岩手医科大学麻酔学講座）

1.整形外科医の立場から（岩手医科大学整形外科学　鈴木　忠 先生）

2.リハビリテーションの立場から

（岩手医科大学リハビリテーション部　坪井　宏幸 先生）

3.臨床心理士の立場から

（岩手医科大学臨床心理室　藤原　恵真 先生）

4.看護師の立場から（岩手医科大学麻酔科外来看護師　高橋ユミ子）

今回は、4つの分野・立場から慢性疼痛患者に対する治療と方法を解説いただき、さらに実際の臨床経験から症例をかなり具体的に提示いただきました。各分野の診療アプローチについて症例を通して理解共有することができ、さらに連携の重要性を感じた検討会となりました。均てん化に向けては、患者の反応をみながら対応策を修正していくことが重要となりますが、具体的に多職種で得られた情報をどのように生かし診療方針を修正変更していくかが課題と考えられました。

職種	参加者数
医師	11名
歯科医師	1名
薬剤師	1名
看護師	5名
保健師	1名
作業療法士	5名
理学療法士	6名
臨床心理士	1名
ソーシャルワーカー	1名

参加者　32名

〔秋田〕

令和5年度　活動報告　秋田県

秋田大学医学部附属病院　麻酔科　**木村　哲**

秋田大学医学部附属病院　麻酔科　**山本　夏子**

令和6年2月2日　星総合病院 慢性疼痛センター見学　　山本　夏子

秋田大学医学部附属病院麻酔科よりペインクリニック外来で診療を行っている今野俊宏、中島麻衣子、山本夏子の3名の医師を派遣しました。星総合病院では病院内のリハビリ施設、病棟、外来を見学させていただきました。笠原諭先生の外来では動機付け面接を用いた診察法、慢性疼痛と成人発達障害との関係、精神科医でなくても使用しやすい抗精神病薬などについて概説していただき大変勉強になりました。多職種カンファランスでは問題を抱えている患者さんの情報や治療方針を共有する様子も参考になりました。

令和6年2月17日　東北ブロック（秋田県）慢性疼痛診療研修会　　木村　哲

前年に引き続き、Zoomオンラインシステムでの開催となりました。当初は対面という選択肢も考えましたが、自宅などからでも気軽に参加できるオンラインでの開催の方がやはりメリットがあるためZoomでの開催としました。宣伝期間がやや短かったためか思うほど参加者が集まりませんでしたが、主に秋田県で慢性疼痛診療に携わる多職種の方々 15名が参加してくださいました。小規模ではあったもののディスカッションは非常に充実していたと思います。

講義内容と講師は以下の通りでした。

(1)慢性疼痛の治療法　秋田大学医学部附属病院麻酔科　山本　夏子 先生

(2)慢性疼痛の運動療法　仙台ペインクリニック理学療法科　大友　　篤 先生

(3)慢性疼痛の心理的アプローチ　東北文教大学人間科学部　三道なぎさ 先生

(4)症例検討　八戸市民病院整形外科　沼沢　拓也 先生

上記講師の先生方に加え、私がファシリテーターとして各4グループでグループディスカッションを行いました。各講義は30分、症例検討は45分と今年度も短い時間の中で講師の先生方には非常に内容の濃い講義をしていただきました。限られた短い時間でのディスカッションであったため時間が十分にとれず講師の先生方には大変ご難儀をおかけしてしまいました。(1)山本先生の講義では、慢性疼痛の薬物治療では高齢者は多剤投与で臓器障害が出やすいことやオピオイドを中止するタイミングの難しさなどがディスカッションで挙げられました。また(2)大友先生の講義では、運動療法によって鎮痛物質が作り出されること、痛くない部分から運動を行い、小さな成功体験を積み重ねることが大事であると教えていただきました。(3)三道先生の講義では、問診の際には生育歴を含めた患者背景を丁寧に聞き出すことが重要であり、患者との対話の際の動機付け面接の方法をわかりやすく教えていただき、大変勉強になりました。(4)沼沢先生の症例検討では、各講義で学んだことを取り入れながら活発なディスカッションが行われました。3時間という時間があっという間に感じられる慢性疼痛診療のエッセンスが詰まった研修会となりました。

職種	参加人数
医師	8名
看護師・助産師	2名
理学療法士	2名
心理士	3名

痛みセンターの見学や慢性疼痛研修会を通して、複雑な痛みを抱える慢性疼痛患者の診療には多職種による連携がいかに重要であるかを痛感しました。多職種で慢性疼痛患者を診療する施設がない秋田県において今後私たちがやるべきことの一つは、来年度以降も地道にこのような研修会を続けていくことだと考えています。

〔宮城〕

［宮城・仙台ペインクリニック］

仙台痛みのフォーラム 多診療科・多職種による地域の痛みの勉強会

仙台ペインクリニック　伊達　　久

仙台地区の痛みに関する様々な専門家が自分の専門を自由に講演し、みんなでディスカッションする場が仙台痛みのフォーラムである。会の発端は2017年、ある研究会の懇親会の雑談がきっかけである。この研究会の特徴は、企業の支援を受けず、自分たちだけで企画運営していることである。企業が関係しないので、自由な発言、さまざまな質問が自由に飛び交う場である。

もともと同じ臨床家でも専門が異なると最新の話題についていけない。その分野では今や常識なことでも他の分野では全くわからないこともある。この勉強会は、専門分野が違う痛みの専門家が集まって自分の専門分野のことを自由に討論する集まりである。2020年度からはCovid19の影響で一時的に勉強会が中断したが、その後WEB開催という方法で再開し、ポストコロナの今年度はやっと対面での勉強会を再開することができた。今年度はコロナ禍で培われたWEBの参加しやすさと、対面でのコミュニケーションの良さの両方を取り入れたハイブリッド開催を行うようになった。

現在参加しているのは、東北医科薬科大学薬学部（機能形態学）、東北大学緩和医療科（緩和医療）、東北医科薬科大学病院がん治療支援科（緩和医療）、東北福祉大学（臨床心理）、仙台ペインクリニック（ペインクリニック）、国際医療大学麻酔科、JCHO仙台病院、東北労災病院などであり、輪が拡がってきている。

第19回仙台痛みのフォーラム

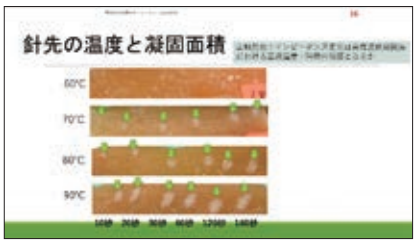
2024年1月25日　19:00 ～　仙台アエル6F　セミナールーム1　ハイブリッド開催

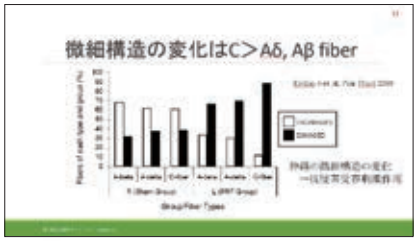
演　　題：パルス高周波療法・高周波熱凝固法

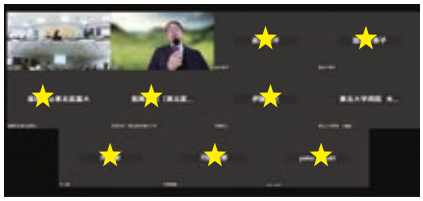
演　　者：伊達　久（仙台ペインクリニック）

座　　長：溝口　広一 先生（東北医科薬科大学薬学部機能形態学教室）

高周波熱凝固やパルス高周波法について基礎研究や臨床応用、実際の症例での使用法などについて講演を行った。その後活発な討論が行われた。







会場での参加は13名　WEB参加は9名

今後も仲間の輪を拡げて、新しいことを皆で共有できたらと思っており、この研究会を通じて病病連携や病診連携、診診連携を深めて、地域の慢性疼痛診療のネットワークを確立していきたい。

（文責　仙台ペインクリニック　伊達　　久）

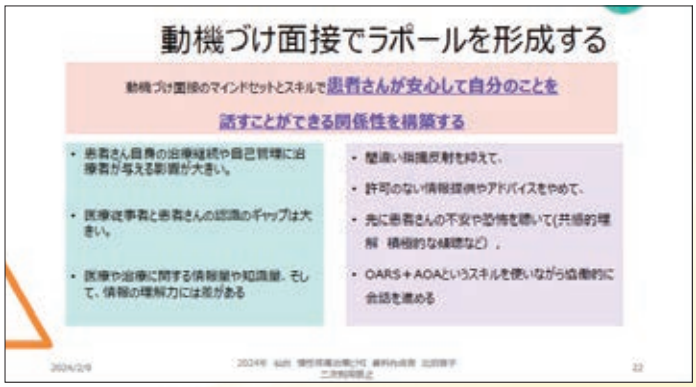
2024年2月11日動機づけ面接（MI）ワークショップ

2019年度から始まったこの研修会も今回で5回目。今回も札幌学院大学の北田雅子先生を招いて動機づけ面接研修会を開催した。今回は初めて午前に基礎編、午後に実践編という1日の総合プログラムでの実施となった。今まではCovid-19の影響でWEBでの講演会が中心であったが、今回は昨年に続いて対面で行うワークショップを開催した。

参加人数は定員30名限定とし、申し込み〆切を待たずに定員に達したため申し込み受付を終了した。体調不良などの理由で急遽欠席となった代わりに、キャンセル待ちの方に参加していただき、計画通りに30名の参加を頂いた。参加者の職種は、医師14名・看護師（保健師）8名・理学療法士3名・臨床心理士（公認心理師）1名・薬剤師3名・柔道整復師1名など多職種の参加であった。

間違い指摘反射をしないこと、聞き手と話し手の会話のバランスを考えること、維持トークとチェンジトークの仕分け、患者にアクティブプランを決めてもらうことなど午前の講義を参考に午後のワークショップを実施した。ワークショップは基本的に2人1組で常に相手を交替し、時には3名や4名でのグループディスカッションを行った。

慢性疼痛患者では両価性（「痛いから動きたくない。だけど運動したほうがよいことはわかっている」など）が多くみられる。このワークショップが慢性疼痛患者とのやりとりに有益をもたらすと思われた。



受講者の感想の一部を紹介する

ワークショップを受講して、治療者と患者さんとの間で行われる会話について改めて考えることができました。患者さんは両価性を持っているため、「変わりたい」というチェンジトークと「このままでいたい」という維持トークをします。それに対して治療者が指示的に関わるのか、あるいは協働的に関わるのかによって面接の効果が全く異なることを学びました。
北田先生のパワフルなワークショップにまた参加したいです。

初めて動機づけ面接を受講しました。動機づけ面接が汎用性の高い手法であり、さまざまな場面でどのような人においても用いることができることがわかりました。実践編のワークショップを通して、患者さんの言葉にはたくさんのメッセージが散りばめられており、それを汲み取り、患者さんの気づきを促していくことが我々の役割であるとわかりました。患者さんから学び、日々訓練を積み重ねていくことが必要だと思います。動機づけ面接をはじめとした心理療法は、慢性疼痛や産業保健の分野において不可欠であり、今後も全国で認知されていく必要があると思いました。

動機づけ面接法の実施方法として、ガイディングスタイルが良いとの説明がすごくわかりやすかったです。演習では演習ごとに意識する課題を一つ一つ明確にしていただいたので意識しやすく演習に取り組めました。
チェンジトークと維持トークの識別練習方法も教えてもらったので、練習をしっかり実施するとともに、職場で興味がある人に広めていきたいと思います。

勉強会に参加して、対患者さんというよりも自分自身のこととよく重ねられた勉強会だったなと思います。まさに両価性なんてその通りで、ならいごとや転職を考えていた時の自分が蘇りました。やりたいけど、何かを踏み出すことや、変化が怖くて動けないんですよね。やってしまえば、正解だったなとか悔いがなかったな、と思えるんですけど。
病院にいて、サポートする立場になると、アドバイスばかりに気を取られてしまうと思いますが、自分の中にMIをうまくとりいれられる時がきたら、きっと患者さんをいやいやでなく、もっとうまくサポートできるだろうなと思いました。それでも、患者さんの中でせめぎあってる気持ちがあることは念頭に今後もケアしていきたいと思います！ありがとうございました。

北田先生が受講生の反応をしっかり観ながらご講義を進めて下さっていたので、参加者も混乱を起こすことなく、疑問を解決しながらワークを進めることができていた。北田先生に改めて感謝申し上げます。

（仙台ペインクリニック　伊達　　久 記）

〔宮城〕

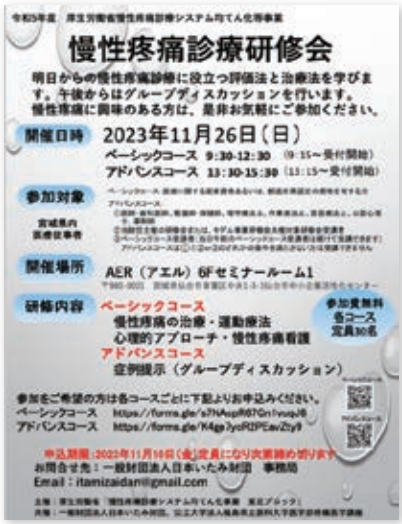
［宮城・仙台ペインクリニック］

慢性疼痛診療研修会 活動報告
～ベーシックコース・アドバンスコース～

仙台ペインクリニック リハビリテーション科
理学療法士　大友　篤

はじめに

慢性疼痛診療システム均てん化等事業 東北ブロック宮城県の活動として、一般財団法人日本いたみ財団と公立大学法人福島県立医科大学医学部疼痛医学講座と共催し、11月26日(日)に慢性疼痛診療研修会のベーシックコース(9:30～12:30)とアドバンスコース(13:30～15:30)を開催しました。各コースの研修会は、宮城県仙台市のAER（アエル）6階セミナールーム1で開催されました。各コースの研修会について以下に報告します。



1.慢性疼痛診療研修会「ベーシックコース」

1)参加者:28名(事前申し込み30名)

医師3名、歯科医師3名、看護師1名、薬剤師2名

心理士1名、理学療法士/作業療法士16名、柔道整復師/機能訓練士2名

2)プログラム

講義Ⅰ「慢性疼痛の治療(薬物療法・インターベンショナル治療)」	仙台ペインクリニック／医師 河野　友美
講義Ⅱ「慢性疼痛患者の運動療法」	仙台ペインクリニック／理学療法士 鈴木　皐平
講義Ⅲ「慢性疼痛患者の心理的アプローチ」	東北文教大学／公認心理師 三道なぎさ
講義Ⅳ「慢性疼痛患者の看護」	清泉クリニック整形外科五反田／外来看護師 東京都健康長寿医療センター研究所／研究員 安藤　千晶

3)研修会講師を担当した仙台ペインクリニック鈴木皐平先生の感想

今回の研修会では「慢性疼痛患者の運動療法」を担当し、慢性疼痛の基礎知識、運動療法を行う前の評価の重要性や運動療法の実際(運動の種類や負荷)について、ディスカッションも含め講義を行いました。

はじめての講師ということで非常に緊張しました。参加者の方々に少しでもわかりやすく説明するために、私自身も基礎知識の再確認や知識を深める機会となり学ぶことが多かった研修会でした。また、他職種に対してはリハビリテーションの専門用語などをもっと噛み砕いてわかりやすく伝えきれない部分もあり、伝えることの難しさを痛感しました。ディスカッションは、提示した内容が参加者に対して難しくはないかと不安でしたが、ファシリテータの手助けもあり、多くの意見交換がでたと感じました。

今回の講義、研修会が、参加者の今後の慢性疼痛診療の一助となればと感じています。

2.慢性疼痛診療研修会「アドバンスコース」

1)参加者:15名(事前申し込み19名)

医師3名、歯科医師4名、看護師1名、理学療法士6名、心理士1名

2)プログラム

講義Ⅰ「症例検討Ⅰ:過活動による腰部痛が出現した慢性疼痛患者」　仙台ペインクリニック副院長/医師 伊藤　裕之

講義Ⅱ「症例検討Ⅱ:環境要因により痛みが増悪した痛覚変調性患者」　仙台ペインクリニック/理学療法士 大友　篤

おわりに

今回の研修会はベーシックコースとアドバンスコースを同日の午前と午後に開催し、アドバンスコースの参加者のほぼ全員は、午前のベーシックコースに参加していました。そのため、ベーシックコースの講義で得た知識を午後のアドバンスコースに繋げられ、症例検討でも各グループで有意義なディスカッションができており、知識の定着に有効であったと感じました。

〔宮城〕

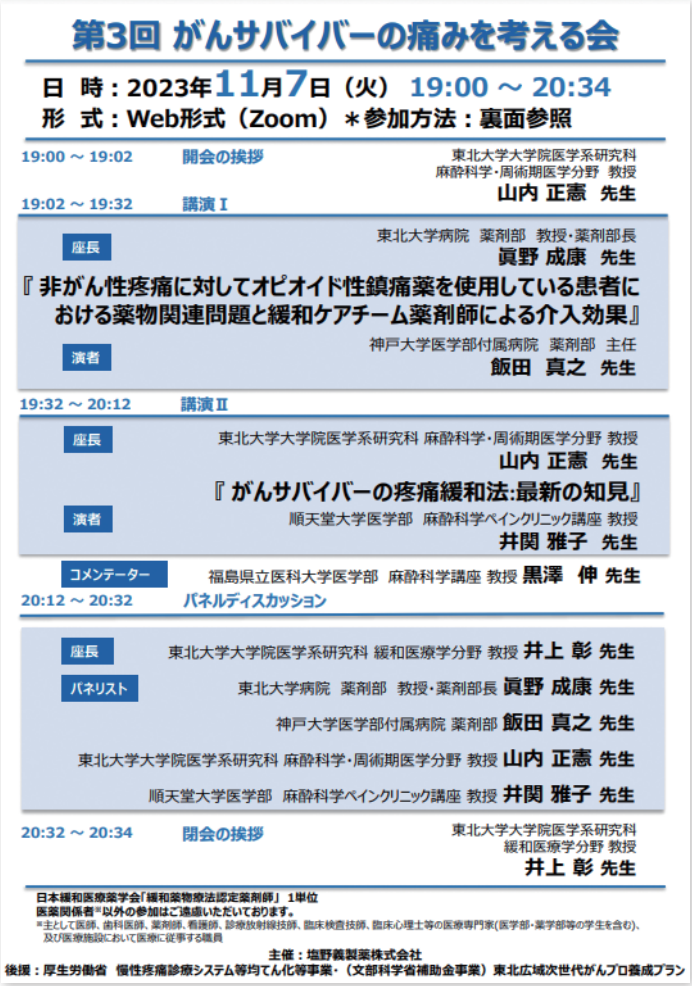
［宮城・東北大学／麻酔科］

第3回がんサバイバーの痛みを考える会

東北大学病院麻酔科　山内　正憲

概要

宮城県を中心に毎年一回開催される「がんサバイバーの痛みを考える会」が、2023年11月7日（火）、Webにて令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業東北支部の協力を得て開催された。医師11名、薬剤師18名の合計29名が参加した。



第3回 がんサバイバーの痛みを考える会

日　時：2023年11月7日（火）19:00 ～ 20:34
形　式：Web形式（Zoom）＊参加方法：裏面参照

19:00 ～ 19:02　開会の挨拶　東北大学大学院医学系研究科 麻酔科学・周術期医学分野 教授 山内 正憲 先生

19:02 ～ 19:32　講演Ⅰ
座長　東北大学病院 薬剤部 教授・薬剤部長 眞野 成康 先生
『非がん性疼痛に対してオピオイド性鎮痛薬を使用している患者における薬物関連問題と緩和ケアチーム薬剤師による介入効果』
演者　神戸大学医学部付属病院 薬剤部 主任 飯田 真之 先生

19:32 ～ 20:12　講演Ⅱ
座長　東北大学大学院医学系研究科 麻酔科学・周術期医学分野 教授 山内 正憲 先生
『がんサバイバーの疼痛緩和法:最新の知見』
演者　順天堂大学医学部 麻酔科学ペインクリニック講座 教授 井関 雅子 先生
コメンテーター　福島県立医科大学医学部 麻酔科学講座 教授 黒澤 伸 先生

20:12 ～ 20:32　パネルディスカッション
座長　東北大学大学院医学系研究科 緩和医療学分野 教授 井上 彰 先生
パネリスト　東北大学病院 薬剤部 教授・薬剤部長 眞野 成康 先生
神戸大学医学部付属病院 薬剤部 飯田 真之 先生
東北大学大学院医学系研究科 麻酔科学・周術期医学分野 教授 山内 正憲 先生
順天堂大学医学部 麻酔科学ペインクリニック講座 教授 井関 雅子 先生

20:32 ～ 20:34　閉会の挨拶　東北大学大学院医学系研究科 緩和医療学分野 教授 井上 彰 先生

日本緩和医療薬学会「緩和薬物療法認定薬剤師」1単位
医薬関係者*以外の参加はご遠慮いただいております。
*主として医師、歯科医師、薬剤師、看護師、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床心理士等の医療専門家(医学部・薬学部等の学生を含む)、及び医療施設において医療に従事する職員
主催：塩野義製薬株式会社
後援：厚生労働省　慢性疼痛診療システム等均てん化等事業・（文部科学省補助金事業）東北広域次世代がんプロ養成プラン

内容

がんサバイバーとは、がんと診断されたすべての人のことを意味している。がんサバイバーはがん治療、心身の負担、がんとの共生をしながらの社会生活など、様々な問題があることを医療者は理解する必要がある。

神戸大学薬剤部主任の飯田真之先生は、「非がん性疼痛に対してオピオイド性鎮痛薬を使用している患者における薬物関連問題と緩和ケアチーム薬剤師による介入効果」というテーマで、痛みに対する薬物治療における薬剤師の役割と、積極的な介入の効果について講演された。座長の東北大学薬剤部　眞野成康教授・薬剤部長からは薬剤師の現状などのコメントと討論を行った。

順天堂大学麻酔科学ペインクリニック講座教授の井関雅子先生は、「がんサバイバーの疼痛緩和法：最新の知見」というテーマで、2023年9月に上梓されたばかりの「がんサバイバーの慢性疼痛治療に関するステートメント」の背景と内容を講演された。座長の私とコメンテーターの福島県立医科大学麻酔科学講座　黒澤 伸教授を交え、がんサバイバーの痛みの特徴と非がん患者の慢性疼痛との相違点を討論した。パネルディスカッションでは東北大学緩和医療学分野 井上 彰教授が座長を務め、全員でがんサバイバーの特徴と痛みと鎮痛方法、社会復帰の課題を討論した。

がん治療の進歩によりがんサバイバーが増える一方、様々な課題も出てきている。痛みの慢性化もその一つで、本事業の後押しで多くの医療人の理解が進む一つになった。

〔宮城〕

［宮城・東北大学／麻酔科］

遺体を用いた神経ブロックセミナー

東北大学病院麻酔科　山内　正憲

概要

2024年1月13、14日の2日間、東北大学医学部解剖実習室において、「遺体を用いた神経ブロックセミナー」が、令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業東北支部の協力を得て開講された。3つのコース（後述）に受講生77名、インストラクター 25名が参加し、基本的な知識と技術から慢性疼痛患者に行いやすい神経ブロックまで様々な技術の講習を行い、より安全性の高い神経ブロック手技の開発も検討した。遺体を用いてトレーニングするという貴重な機会に参加者の意識は高く、盛況のうちにセミナーは終了した。

白菊会の皆さまと東北大学器官解剖学分野のご協力に深謝いたします。

慢性疼痛患者に対する神経ブロックの意義

痛みに対する神経ブロックは、手術患者や癌患者、帯状疱疹や椎間板ヘルニアなどによるいわゆる神経痛患者などに行われているが、慢性疼痛患者に神経ブロックは適応となりづらい。その理由は一時的な鎮痛を得ることが慢性疼痛の根本治療とはならないからである。しかし、慢性疼痛でも患者のADL拡大に比例して痛みが強くなる場合、慢性疾患の急性転化の状態を呈することがある。外来での神経ブロックはその痛みを和らげ、交感神経ブロック効果で血流が改善し、リラックスできる時間を作ることで、患者の救いの一つとなる。神経ブロックをはじめとする適切な痛み治療があることで、慢性疼痛患者は安心して日常生活の質を高めることができる。

セミナーの詳細

神経ブロックは高度な技術を要するため、効果的なトレーニングが必要である。今回、優れたエキスパートの指導の下で遺体に対して神経ブロックの技術を習得するセミナーを開催した。受講者のニーズを検討して3つのコースを設定した。標準コースは65名が参加し、腕神経叢ブロック、M-TAPAブロック、三叉神経ブロック、内転筋管ブロックを実習した。初心者コースは9名が参加し、前鋸筋面ブロック、大腿神経ブロック、膝窩部および臀部での坐骨神経ブロックを実習した。胸部コースは12名が参加し、気管支鏡を用いた観察と表面麻酔、傍脊椎神経ブロック、脊柱起立筋面ブロックを実習した。インストラクターは東北地方からは17名が参加して活躍した。

安全に実践的なトレーニングをできる機会は少なく、全国的にも貴重な機会であるため、本セミナーは募集から1週間程度で定員となった。遺体に対して①超音波装置で神経と周囲の筋肉や組織の関係を確認し、②目標とする神経ブロックを行い、③患者に行う際の局所麻酔薬の代りに色素を投与した後に肉眼解剖を行う。この一連のトレーニングをインストラクターが丁寧に指導することで、①超音波画像の確認方法、②ブロック針の進め方、③色素の広がりの観察による効果の機序の理解、を実践的に習得できるセミナーであった。

実習前の説明の様子

超音波ガイド下神経ブロックを熱心に学ぶ受講者たち

〔宮城〕

［宮城・東北大学／麻酔科］

慢性疼痛診療研修会・講習会受講効果のアンケート調査

東北大学病院麻酔科 鈴木 潤
東北大学予防歯科学分野 笹井 真澄
東北大学病院麻酔科 山内 正憲

【背景】

本年度から始まった「慢性疼痛診療システム均てん化等事業」では、旧モデル事業実施の6年間に引き続き慢性疼痛診療研修会・講習会を実施しており、多くの受講者から好評を得ている。一方で、研修会・講習会で学んだ受講者がどのように慢性疼痛診療に関わっているか、臨床の現場で学びを活かせているかどうかについての長期的な影響に関する調査は行われてこなかった。そこで、①受講者の知識がどの程度残っているか、②受講を現場で活かすことができているか、という2つの観点から、過去に東北ブロック研修会・講習会に参加した受講者を対象としたアンケート調査を行った。

【方法】

アンケート調査は2023年12月～ 2024年1月に行い、電子メールで依頼し、非記名でオンライン回答できる形式を用いた（資料1）。

【結果】

21名が回答した。職種は医師が約半数を占めた一方で、多様な職種の受講者が回答した（表1）。医師9名と医師以外12名で慢性疼痛との関わり方に大きな違いがあった結果はそれぞれのグループ別に示した。

慢性疼痛との関わり方に関して、医師は9割以上の受講者が5年以上の慢性疼痛診療歴があり、全員が月に1例以上は慢性疼痛診療に関わっていた。医師以外の受講者では、診療歴が1年未満および慢性疼痛診療に関わる頻度がほぼないと半数以上が回答した（グラフ1 ～ 3）。

慢性疼痛の診療部位としては、医師も他の職種も「腰部」が最も多く、続いて「下肢」が多いことがわかった（グラフ4）。一方で、頭頸部や口腔内など様々な部位の慢性疼痛診療に関わっていることもわかった。慢性疼痛の診療頻度がほとんどないと答えた受講者においても腰部が最も多いことから、本邦における慢性腰痛症の頻度が極めて高いことが改めて浮き彫りになったといえる。

アンケート項目5から8では知識を自己評価してもらった（グラフ5 ～ 8）。痛みの多角的評価、薬物療法、神経ブロックの各項目について、医師は十分な知識を自負していたが、医師以外はそれらの知識に自信がないと感じている受講者が多かった。心理・精神的な治療や診察については、医師も医師以外の職種も「自信がない」という受講者が多かった。

講習会の内容やグループワークに関しては、ほぼ全員が「役に立っている」と回答していた（グラフ9 ～ 12）。その中で多かったのは「慢性痛の特徴」、「多角的評価方法」、「心理・精神的な治療や診療の知識」の3つであった。「薬物療法や神経ブロックの知識」が役に立っていると回答した受講者は、医師と医師以外のいずれにおいても少なかった。

【考察】

受講者の背景：医師の受講者は慢性疼痛の診療経験が長く、研修会・講習会に参加した目的も明確だったと推測される。一方、医師以外の受講者は慢性疼痛の診療に関わった経験が浅く、不慣れな人材が多かった。現行の内容は最新の知識の整理やグループワークによる意見交換を通し、様々な職種・経験者と深めるものである。運営上は経験のある医師と経験の浅い医療スタッフという組み合わせが多いことを前提とした配慮や、活かした取り組みも有効と思われる。慢性疼痛診療の頻度が高くない医療人が興味を持って参加してくれていることは裾野を広げること、すなわち均てん化を図る上で非常に重要である。受講後も継続して慢性疼痛診療の学びを支援する機会の提供も必要であろう。経験ある医師の主な診察部位が腰下肢であったことから、本邦の慢性腰下肢痛の頻度が多いことが改めて浮き彫りになった。

研修会・講習会の内容：受講者が有益だったという内容は、神経ブロックや薬物療法よりも心理・精神的な治療や診療の知識であった。このことは、慢性疼痛に対しては侵襲的あるいは薬理学的な介入に限界を感じ、心理・精

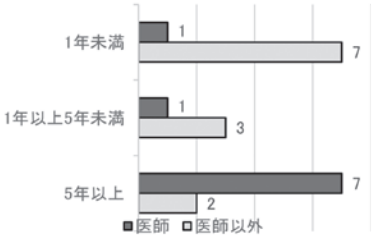
神的な介入や運動療法などの非薬理学的な介入に期待している受講者が多い結果と考えられる。一方で心理・精神的な治療や診察は職種に関わらず、現在の医学教育では不慣れと思われる。幸いなことに、本講習会・研修会の受講を多くの受講者が「同僚に勧める」と回答してくれた。今後も伝えるべき内容を受講者のニーズに合わせて発信する必要がある。

今後に向けて：「均てん化」を辞書で引くと「平等に利益、恩恵を受けること、また、与えること」と書かれている。全国の慢性疼痛患者が等しく高い水準の診療を受けられるように、多様な職種・経験の受講者が気軽に参加し、継続して学び続ける研修会・講習会であることが期待できた。

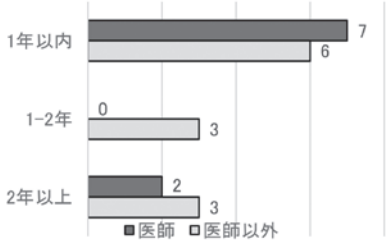
表1.回答者の職種

職種	人数
医師	9名
歯科医師	1名
看護師	4名
理学療法士	4名
作業療法士	1名
臨床心理士	1名
精神保健福祉士	1名

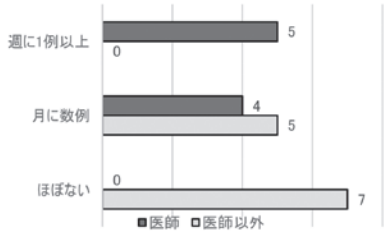
1.慢性疼痛の診療歴を教えてください。



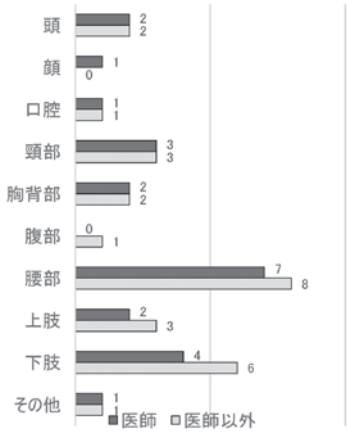
2.受講からの経過を教えてください。



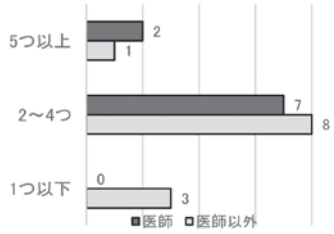
3.慢性疼痛の診療に関わる頻度を教えてください。



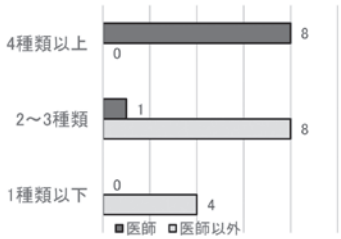
4.慢性疼痛の診療部位として多いところを教えてください。(3つまで回答可)



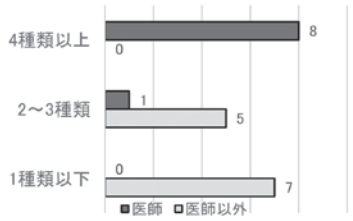
5.いたみの多角的評価方法について教えてください。



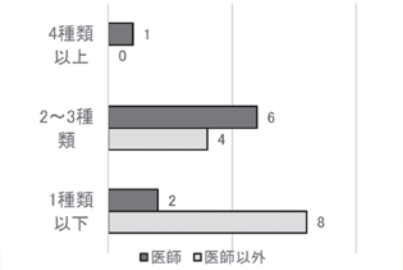
6.鎮痛剤・鎮痛補助薬の機序による種類について教えてください。



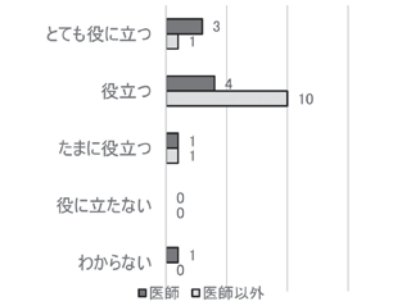
7.神経ブロックや注射による鎮痛について教えてください。



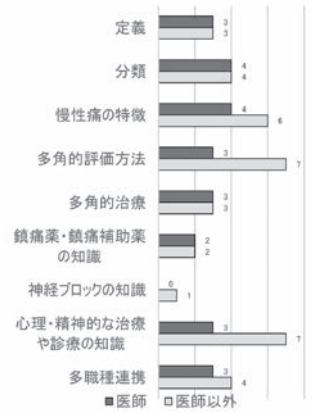
8.心理・精神的な治療や診察について教えてください。



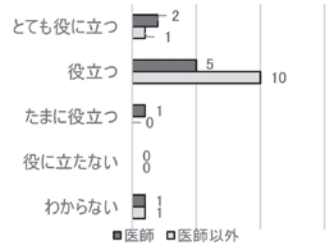
9.講習会内容について教えてください。



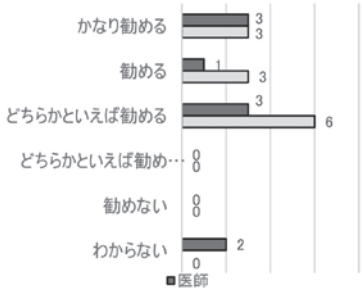
10.役に立っていることを教えてください。



11.グループワークについて教えてください。



12.同僚に本講習の受講を勧めますか?



資料1.アンケート内容

1.慢性疼痛の診療歴を教えてください。
_____年

2.受講からの経過を教えてください。
1年以内　1－2年　2年以上

3.慢性疼痛の診療に関わる頻度を教えてください。
週に1例以上　月に数例　ほぼない

4.慢性疼痛の診療部位として多いところを教えてください。(3つまで回答可)
頭　顔　口腔　頸部　胸背部　腹部　腰部　上肢　下肢　その他

5.いたみの多角的評価方法について教えてください。
5つ以上挙げることができる　2～4つ挙げることができる　1つ以下挙げることができる

6.鎮痛剤・鎮痛補助薬の機序による種類について教えてください。
4種類以上挙げることができる　2～3種類挙げることができる　1種類以下挙げることができる

7.神経ブロックや注射による鎮痛について教えてください。
4種類以上見たことがある　2～3種類見たことがある　1種類以下見たことがある

8.心理・精神的な治療や診察について教えてください。
4種類以上見たことがある　2～3種類見たことがある　1種類以下見たことがある

9.講習会内容について教えてください。
とても役に立っている　役立つ　たまに役立つ　役に立たない　わからない

10.役に立っていることを教えてください。(3つまで選択可能)
定義　分類　慢性痛の特徴　多角的評価方法　多角的治療　鎮痛薬・鎮痛補助薬の知識
神経ブロックの知識　心理・精神的な治療や診療の知識　多職種連携

11.グループワークについて教えてください。
とても役に立っている　役立つ　たまに役立つ　役に立たない　わからない

12.同僚に本講習の受講を勧めますか？
かなり勧める　どちらかといえば勧める　勧める　どちらかといえば勧めない
勧めない　わからない

〔宮城〕

［宮城・東北大学／歯科］

歯科医師のための慢性疼痛診療講習会・研修会報告

東北大学大学院歯学研究科
歯科口腔麻酔学分野　水田健太郎

慢性疼痛診療システム均てん化等事業 東北地区の活動として、東北地区の歯科医師に限定し、同職種連携を目的とした講習会と研修会を開催した。以下にその概要を報告する。

1.講習会「歯科医師のための慢性疼痛診療講習会」

日　　時：令和5年10月22日（日曜日）10：00～13：00　　会　　場：Zoomオンラインシステム
配 信 元：仙台PARM-CITY131ビル 5階会議室　　対　　象：歯科医師
募集方法：東北6県の県・郡市区歯科医師会、歯科大学、医学部口腔外科に案内を郵送
参加者数：80名

プログラム

・10：00～10：05 開会の挨拶　　水田健太郎（東北大学大学院歯学研究科 歯科口腔麻酔学分野）
・10：05～11：00「口腔顔面領域の慢性疼痛」　　嶋田　昌彦（東京医科歯科大学 名誉教授）
・11：00～12：00「口腔顔面痛離床の実際I ～口腔顔面痛の神経ブロック療法とその適応～」
坂本　英治（九州大学病院　顎顔面口腔外科）
・12：00～13：00「口腔顔面痛臨床の実際II ～痛みのメカニズムに基づいた薬の使い方～」
村岡　　渡（川崎市立井田病院　歯科口腔外科）
・13：00～13：05 閉会の挨拶　　水田健太郎（東北大学大学院歯学研究科 歯科口腔麻酔学分野）

嶋田氏は長年に渡る豊富な診療経験をもとに口腔顔面領域の慢性疼痛の診断の診療の基礎について、初学者向けに平易な言葉で講演された。坂本氏は口腔顔面痛治療における神経ブロックの方法について自験例を交えながらわかりやすく解説された。村岡氏は口腔顔面痛診療における薬物療法の実際について自験例を交えながらわかりやすく解説された。

本講習会は東北一円から80名の参加者があり、盛況であった。昨年度受講した参加者も多く、東北地区の口腔顔面痛診療の基盤づくりが着実に進んでいることが感じ取れた。

2.研修会「歯科医師のための慢性疼痛診療研修会」

日　　時:令和6年1月21日(日曜日) 10:00～16:10　　会　　場:仙都会館8階会議室
対　　象:歯科医師　　募集方法:東北6県の県・郡市区歯科医師会、歯科大学、医学部口腔外科に案内を郵送
参加者数:25名

プログラム

・10:00～10:05 開会の挨拶	伊達　　久(仙台ペインクリニック)
・10:05～10:15 アイスブレイク	
・10:15～11:10 講義I「口腔顔面領域の慢性疼痛　総論」	小見山　道 (日本大学松戸歯学部　クラウンブリッジ補綴学講座)
・11:10～12:10 講義II「口腔顔面領域の神経障害性疼痛とその対応」	樋口　景介(石巻赤十字病院　歯科口腔外科)
・13:00～13:45 講義III「咀嚼筋の筋筋膜性疼痛とその対応」	村岡　　渡(川崎市立井田病院　歯科口腔外科)
・13:50～14:35 講義IV「難治性口腔顔面痛の心理社会的因子」	坂本　英治(九州大学病院　顎顔面口腔外科)
・14:35～15:45「症例提示・症例検討」	廣谷　拓章(大崎市民病院　歯科口腔外科)
・15:45～16:10 質疑応答	
・16:10 閉会の挨拶	水田健太郎 (東北大学大学院歯学研究科 歯科口腔麻酔学分野)

ファシリテータ【50音順】
小川　　徹(東北大学大学院歯学研究科　口腔システム補綴学分野)
工藤　葉子(北海道大学大学院歯学研究科　歯科麻酔学教室)
小見山　道(日本大学松戸歯学部　クラウンブリッジ補綴学講座)
坂本　英治(九州大学病院　顎顔面口腔外科)
樋口　景介(石巻赤十字病院　歯科口腔外科)
廣谷　拓章(大崎市民病院　歯科口腔外科)
村岡　　渡(川崎市立井田病院　歯科口腔外科)

本研修会は、歯科医師向け研修会としては初の対面形式で開催した。研修会を円滑に実施するため、会に先立ち演者・ファシリテータ打ち合わせをWEBで複数回行い、全体の流れ、方向性について事前にすり合わせを行った。

研修会では参加者24名を4名ずつ6グループに編成し、各講義毎に約10分間のグループディスカッションを行った。

小見山氏は、口腔顔面領域の慢性疼痛全般の基礎知識について非常にわかりやすく、自験例を含めて解説された。樋口氏は口腔顔面領域の神経障害性疼痛とその対応について、平易に解説された。村岡氏は、咀嚼筋の筋筋膜性疼痛とその対応についてわかりやすく解説された。坂本氏は、難治性口腔顔面痛の心理社会的因子について概説された。廣谷氏は自験例をグループワークの教材として提示し、3度のディスカッションを行った。

各グループでは、参加者とファシリテータとの間で活発な議論がなされた。今回の参加者は昨年度の講習会・研修会の受講経験がある方が多く、スムーズに会を運営することができた。また、オンラインで行った昨年度より各グループが活発に議論しているのが見て取れ、また実際に実技も行うことができたため好評であった。

(東北大学大学院歯学研究科　歯科口腔麻酔学分野　水田健太郎)

〔宮城〕

［宮城・東北医科薬科大学］

令和5年度厚生労働省慢性疼痛診療システム均てん化等事業活動報告

東北医科薬科大学医学部
整形外科学
教授
小澤　浩司

第2回仙台慢性疼痛研修会を開催して

第2回仙台慢性疼痛研修会を開催しましたので報告いたします。

日　　程：2024年1月19日（金曜日）18：30 ～ 20：20　　会　　場：JCHO仙台病院多目的ホール

参 加 者：医師、リハビリスタッフ、薬剤師、栄養士、事務職　22名

プログラム

講演①　18：35 ～ 19：10

座長：山城　　晃（JCHO仙台病院 ペインクリニック長）　　講師：松浦　夏子（JCHO仙台病院 主任薬剤師）

「ピクトグラフを用いた痛みの訴えの評価と薬剤選択の新たな試み」

講演②　19：10 ～ 19：45

座長：小澤　浩司（東北医科薬科大学　整形外科教授）　講師：本　　幸枝（星総合病院　慢性疼痛センター看護師、いたみ専門医療者）

「慢性疼痛患者との向き合い方」

講演③　19：45 ～ 20：20

座長：小澤　浩司（東北医科薬科大学　整形外科教授）　講師：山城　　晃（JCHO仙台病院 ペインクリニック長）

「仙腸関節・腰痛センターと連携したペインクリニック診療の実際」

どの講演も、患者とのコミュニケーションを大事にして、患者の心に寄り添うことがより良い治療につながることを強調しており、印象的であった。

講演風景

松浦　夏子講師

本　　幸枝講師

山城　　晃講師

〔山形〕

令和5年度活動報告

山形大学医学部整形外科学講座
助教　鈴木　智人

慢性疼痛診療研修会

日　　時：2024年1月20日（土）　14：00 ～ 17：30　　会　　場：山形国際ホテル　蔵王の間
参 加 者：主に山形県内の医療従事者22名

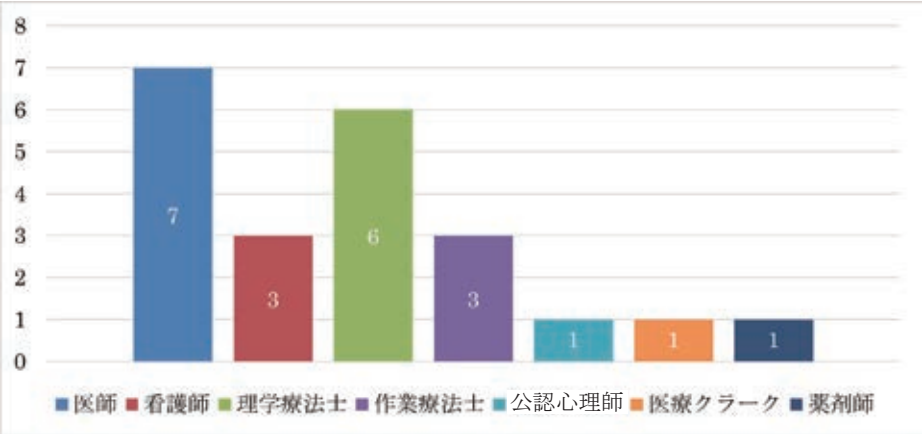
研修プログラム

1.慢性疼痛とは　診断・評価
　山形大学医学部整形外科学講座　鈴木　智人
2.慢性疼痛の薬物療法
　星総合病院　薬剤部　福地　朋子 先生
3.慢性疼痛患者の運動療法
　星総合病院　リハビリテーション科　岩崎　　稔 先生
4.慢性疼痛患者への心理的アプローチ
　東京大学医学部附属病院 麻酔科・痛みセンター　笠原　　諭 先生
5.症例検討
　山形大学医学部附属病院　疼痛緩和内科　飯澤　和恵 先生

コロナ禍のためにZoomによるWeb開催を余儀なくされていましたが、福島県との合同企画により山形市内で現地開催することができました。医師（内科、麻酔科、整形外科）、看護師、リハビリスタッフ、医療クラーク、公認心理師といった様々な職種の方に参加いただき（グラフ参照）、上記のプログラムで慢性疼痛に関わる幅広い分野を共有する貴重な機会となりました。

Face to Faceによるディスカッションの素晴らしさを再確認し、また過去3年間に渡り山形県内の本事業に多大なる御指導と御協力を頂戴していた福島県の皆様との横のつながりを強化できたのではと思います。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

事後のアンケートでは、「今後の慢性疼痛チームの活動に活かしていける内容が多かった」、「ディスカッションが多く、意見交換が活発にできた」といった好意的な内容が多数を占め、「もっと多く開催してほしい」という嬉しい一言も頂きました。来年度以降も継続的に本事業の発展に努めてまいる所存です。



〔山形〕

星総合病院慢性疼痛センター見学

山形大学医学部附属病院
疼痛緩和内科　**飯澤　和恵**

右が筆者。
小林なぎさ先生と一緒に見学しました！

昨年9月に星総合病院慢性疼痛センターを見学させていただきました。隣県にありながら星総合病院は私にとっては未知の存在で「NHK特集で見た」程度の認知度でしたが、ある患者さんの紹介を機に、「集学的治療」の素晴らしさ、目指すべき医療に実際触れる機会を得ることができました。医療のスケールの違いは、まるで「小さな日の当たらない個室」対「青空の広がる広い世界」。病院の雰囲気も明るく、スタッフ達からもエネルギーが溢れているような気がしました。

見学に先立ってWeb合同カンファレンスに参加させていただきました。これまでは一人で診療し、ようやく小林先生の応援を頂けるようになったところで、難治性疼痛患者は「困った患者」であり、詳しく分析したこともありませんでした。正直、星総合病院で経験したカンファレンスは衝撃で、私を打ちのめしました。こんなに高いレベルで患者を診てるんだ！（診ないといけないのだ！）

そんなカンファレンスを経験し、少々緊張して臨んだ見学でした。見学に先立ち、理学療法士の二瓶さんが無駄のない、詳細なスケジュールを組んでくれ、その丁寧さに安心できました。郡山駅から少し歩くと、病院というより都会的でありながら憩いを感じさせる外観が見え、木漏れ日の中を玄関まで進んでいきました。既に二瓶さんが待ち構えて案内してくださいました。お昼に到着したのでまずは院内のレストランでお食事。安い！美味い！こだわりが素晴らしい！

その後はリハビリ見学。「プールがある！！綺麗！」鏡張りのきれいな室内。「バレーのレッスンできちゃうな。姿勢を逐一チェックしながらリハビリするのかな？忘年会の出し物の練習もここでするとか。恥ずかしいような、でもクオリティー高そう。」理学療法士さんは水泳、ヨガ、なんでもできる優しくて頼もしい存在。

その後、その日入院プログラムを卒業する患者様の心理面接に同室させていただきました。普通は難しいと思います。ありがとうございます。先のカンファレンスで、心理士さんの話には全くついていけず、恐怖すら感じていましたが、なんと優しい方なのでしょう。患者さんは終始笑顔でした。

その日は卒業式が行われ、高橋先生が卒業証書を渡し、関わったスタッフ皆で写真撮影。患者様もスタッフもみんな笑顔。「自分は本当は幸せだったんだなあ」と患者様は思い出されたみたい。的確なプログラムとスタッフの献身的で人間味あふれる関わり合いがもたらした結果だと思います。長野から来た70歳代の男性で、何もできなかったはずが1日8000歩も歩けるようになっていました。自宅に帰ればしなければならない事が増えるので6000歩程度に減らすのだとか。セルフケアもしっかり学ばれたようです。

外来見学後カンファレンスに参加。名前ばかりの多職種ではないことは以前知った通り。各々が問題点とその解決策を提示され、残念ながらまたもやついていけませんでした。 2回目だけどその内容はやっぱりすごい。動画で患者様の歩行が改善する様子も見せていただきました。

とってもヘルシー

その日の最終は懇親会。この日は他にも県外から二人の看護師さんが見学にいらしていました。院内レストランで美味しいお食事と楽しいおしゃべり。矢吹先生、高橋先生をはじめ、皆様ご多忙の中だったと思います。楽しい一時を過ごさせていただき、ありがとうございました。心のこもったおもてなしは、感謝だけでなく、「私も」と思わせ、これからさらに世界が広がりそうな予感がしました。

本さん中心に見学のメンバーと

私が紹介した患者様は、とにかく電話をかけてくる方でした。当院では煙たがられていましたが、看護師の本さんがどーんと引き受けてくれました。本さんからもたくさん学ばせていただいております。無事入院プログラムを終了することができ、また一人とその家族が「幸せ」を取り戻されたのではないでしょうか。

この感謝には、「星」を目指して、山形の医療を支える人材を育てることでお返ししたいと思います。できるかな、ではなく、しなくちゃ。

心尽くしの見学、本当にありがとうございました。

病院外のイベントにも参加

〔山形〕

山形大学附属病院における慢性疼痛診療の取り組みについて

山形大学医学部慢性疼痛緩和内科
東北文教大学人間科学部
小林なぎさ
（臨床心理士・公認心理師）

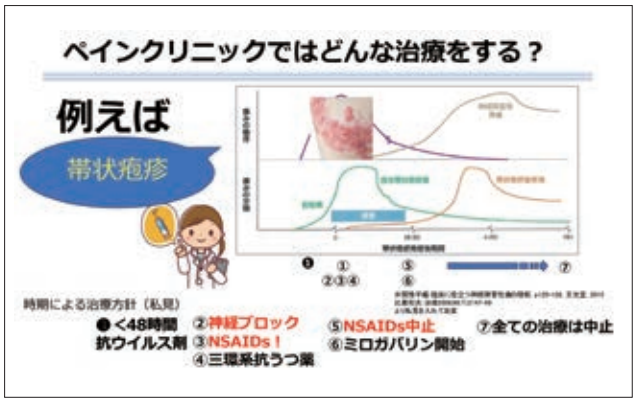
令和5年度より、飯澤和恵先生のご尽力のもと、山形大学医学部附属病院疼痛緩和内科におきまして集学的治療が始まりました。現在、毎月第3週の金曜日に麻酔科医師、理学療法士、公認心理師、医療クラークの4名で多角的アプローチを行っております。また、今後は整形外科の鈴木智人先生のお力も借りながら、より充実した集学的治療を展開していきたいと考えております。

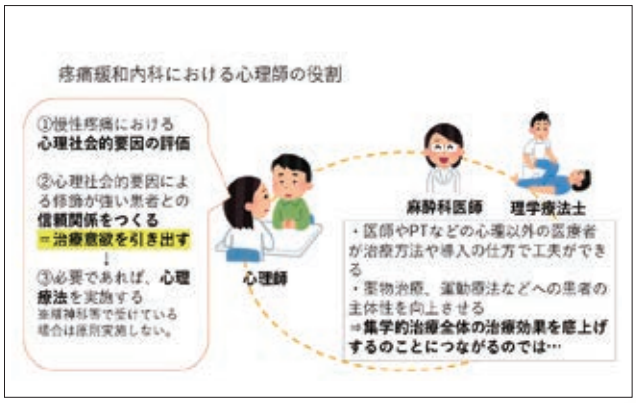
また1月には、山形大学附属病院内における慢性疼痛診療の周知および院内の連携を深めることを目的に慢性疼痛診療講習会を以下の通り、開催致しました。

日　　程：2024年1月31日（水曜日）18：30 ～ 20：00　　会　　場：山形大学医学部交流会館
参 加 者：山形大学医学部附属病院の医療従事者、医療関係者15名

プログラム

座長：鈴木智人先生（山形大学医学部整形外科学講座　助教）
講演1「ペインクリニックで行う痛みの診療」　飯澤　和恵 先生（山形大学医学部附属病院　疼痛緩和内科）
講演2「ペインクリニックにおける心理的アプローチ」　小林なぎさ（山形大学医学部附属病院　疼痛緩和内科）





〔福島〕

令和5年度慢性疼痛センターでの就労支援の取り組み

福島県立医科大学医学部疼痛医学講座　教授
星総合病院慢性疼痛センター　副センター長
髙橋　直人

星総合病院慢性疼痛センターは2015年4月に設立され、本年度で9年目を迎えました。我々痛みセンターでは整形外科医が中心となり、精神科医、看護師、理学療法士、作業療法士、公認心理師、薬剤師および管理栄養士の7職種8専門家で構成された診療チームで多職種連携集学的痛み治療を実施しております。慢性疼痛に対する我々の治療は、患者さんを生物心理社会モデルと捉え、身体的・心理社会的に多面的な評価を行い、慢性疼痛の病態を診断した上で、痛みのない状態にすることは難儀であるが疼痛管理を最適化すること、機能的能力や身体的・精神的健康を向上させること、患者のQOLを向上させること、副反応などの有害転帰を最小化することを目標に行います。そして、通常の日常生活を取り戻すことができれば、就労に復帰することが最終的な目標となります。

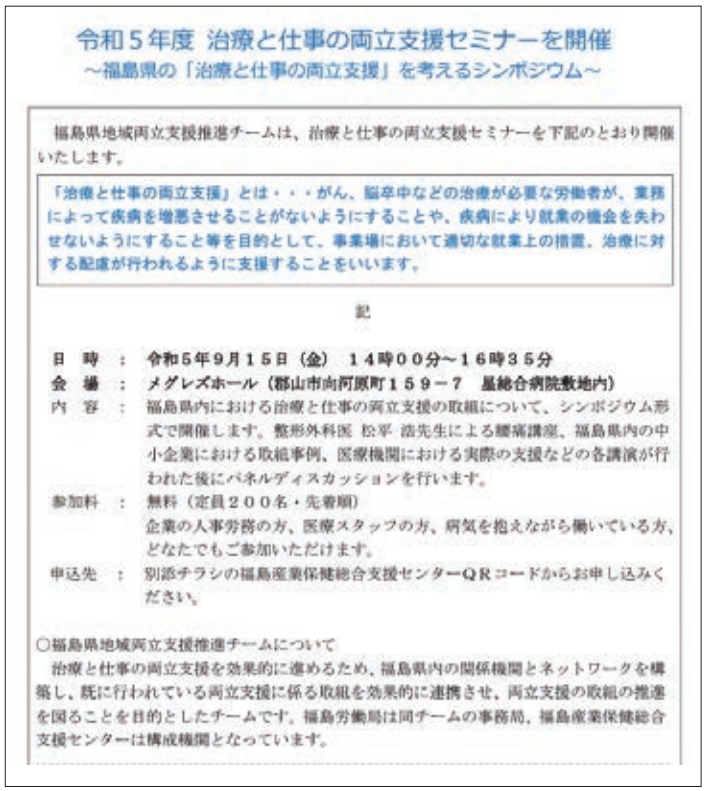
慢性疼痛を有する患者さんの中には痛みを有することで、身体的にも精神的にも健康が維持できず活動性が低下していることや治療を優先するが故に、休業や生産性低下といった就労に支障をきたしていることも少なくありません。このような患者さんに対し就労支援をどのようにしていくかを検討することは、我が国の国内総生産（GDP）を上げることや政府が掲げる一億総活躍社会を実現していく上で重要になってくると考えております。そこで我々痛みセンターでは、慢性疼痛に起因する就労不能（アブセンティズム）や生産性低下（プレゼンティズム）についての研究とそれらの障害を予防するマニュアルを作成する研究も行っております。すなわち、企業と提携して労働環境での実用性を検証し、完成・普及させることを研究目標とした「慢性の痛み患者への就労支援の推進に資するための多角的包括的研究」を起草し、本年度も取り組んでまいりました。

就労が困難となる要因や問題点を的確に評価するために「心理社会的フラッグシステム」が世界の有識者による会議を経て2009年に英国で開発され、欧州では各国のガイドラインで推奨されるなど広く普及されました。しかし、この欧米での「心理社会的フラッグシステム」は、社会の仕組みが異なる本邦に直接導入して用いることは適切ではありません。そこで、就労支援の研究の一環として、我々の施設では本邦の実情に合わせた新たな心理社会的フラッグシステムを開発しました。この新フラッグシステムの中にてブルーフラッグを「仕事と治療の両立支援」、ブラックフラッグを「就労支援」と定義しております。このフラッグシステムを用いると就労復帰への支援を行う上で問題点が整理されます。

しかしながら、これだけでは就労を支援する上では不十分であることが判明しました。それは、医療従事者はいたみ治療には特化できるものの、就労復帰のための企業側へのアプローチなど、そういった介入に関しては難しい面があるからです。そこで、就労困難となっていた患者さんに対して社会復帰までが真の意味で治療であると考えると、医療機関との連携だけでは困難なこと、医療機関外の身近な社会資源と協力することも慢性疼痛診療では大いに役立つこと、多職種とは医療従事者のみでないこと、すなわち行政、福祉等との連携も重要ではないかと考えるに至りました。

星総合病院慢性疼痛センターでは「仕事と治療の両立支援」の有用な外部資源として全国に先駆けて福島産業保健総合支援センター（産保センター）との連携を開始しました。産保センターとは、事業場における治療と仕事の両立のための取り組み、両立支援制度の導入を支援してくれる機関で、慢性疼痛を有し、休職を余儀なくされている患者さんへの相談、支援も同時に行ってもらえます。本年度では我々の施設で多職種連携集学的痛み治療を受け休業を余儀なくされていた5人の患者に対して、患者紹介や合同カンファランスなどを行った上で就労復帰を支援していただき、全員が仕事復帰するに至りました。この場をお借りして、産保センターのスタッフの皆様に厚く御礼申し上げたいと存じます。

本年度は2023年9月15日に我々痛みセンターと産保センターが連携し、「治療と仕事の両立支援セミナー」を開催させていただきました。開催内容は下記の通りとなっております。



令和５年度 治療と仕事の両立支援セミナーを開催
～福島県の「治療と仕事の両立支援」を考えるシンポジウム～

福島県地域両立支援推進チームは、治療と仕事の両立支援セミナーを下記のとおり開催いたします。

「治療と仕事の両立支援」とは・・・がん、脳卒中などの治療が必要な労働者が、業務によって疾病を増悪させることがないようにすることや、疾病により就業の機会を失わせないようにすること等を目的として、事業場において適切な就業上の措置、治療に対する配慮が行われるように支援することをいいます。

記

日　時　：　令和５年９月１５日（金）　１４時００分～１６時３５分
会　場　：　メグレズホール（郡山市向河原町１５９－７　星総合病院敷地内）
内　容　：　福島県内における治療と仕事の両立支援の取組について、シンポジウム形式で開催します。整形外科医 松平 浩先生による腰痛講座、福島県内の中小企業における取組事例、医療機関における実際の支援などの各講演が行われた後にパネルディスカッションを行います。
参加料　：　無料（定員２００名・先着順）
企業の人事労務の方、医療スタッフの方、病気を抱えながら働いている方、どなたでもご参加いただけます。
申込先　：　別添チラシの福島産業保健総合支援センターＱＲコードからお申し込みください。

○福島県地域両立支援推進チームについて
治療と仕事の両立支援を効果的に進めるため、福島県内の関係機関とネットワークを構築し、既に行われている両立支援に係る取組を効果的に連携させ、両立支援の取組の推進を図ることを目的としたチームです。福島労働局は同チームの事務局、福島産業保健総合支援センターは構成機関となっています。

令和5年9月15日、メグレズホール（郡山市の星総合病院敷地内）において、「令和5年度 治療と仕事の両立支援セミナー」が開催されました。同セミナーは、福島産業保健総合支援センターが主催し、福島県地域両立支援推進チーム（福島労働局が事務局を務めています。）、厚生労働省慢性疼痛診療システム均てん化事業の共催により開催したものです。

同セミナーでは、福島県立医科大学医学部疼痛医学講座特任教授の松平浩先生による腰痛対策と両立支援に関する特別講演、（株）大丸工務店の常務取締役大和田隆氏による中小企業における両立支援の取組みに関する講演等があり、福島労働局は両立支援の取組み及び労働衛生対策について説明を行いました。

また、福島労災病院の江尻副院長、福島産業保健総合支援センターの両立支援促進員の佐藤氏が進行を務めるパネルディスカッションにおいて、松平教授、大和田常務取締役、福島労災病院の医療ソーシャルワーカーの千葉氏、福島産業保健総合支援センターの佐々木副所長とともに、両立支援を巡る現状及び課題について意見交換を行いました。

福島県立医科大学の松平教授による特別講演

https://jsite.mhlw.go.jp/fukushima-roudoukyoku/newpage_01851.html

このセミナーでは、星総合病院慢性疼痛センター所属の松平浩医師が、特別公演「プレゼンティーズム・ゼロを目指して　～新たな視点に立った腰痛対策と両立支援～」との演題名で、腰痛を抱えながら仕事をしている労働者に対し、腰痛対策の方法や運動やストレッチングのやり方など、実技を踏まえながらご教示くださいました。私も含め聴講した参加者にとって大変勉強になる内容でした。

このセミナーを通して、企業側もこの問題にかなり興味を持ち取り組んでいるところが多いということがわかりました。医療以外の外部資源との連携を経験し、お互いが顔の見える関係となることにより、より相談しやすい環境が生まれ、両立支援を必要とする患者さんへの集学的痛み治療の質の向上も期待することができると感じました。また、産保センターのようなその道のプロである医療職以外の外部資源に参入してもらうことで、我々痛みセンターの医療スタッフの負担軽減にもつながったと考えております。患者さんにとっても適した支援が行えるようになったと実感しております。

このように外部資源と連携するには、症例ごとにきちんと痛みに対する多面的評価を行い、就労困難となっている問題点を適切に指摘する必要があります。そういう意味では、今後は、我々も「新・心理社会的フラッグシステム」をブラッシュアップし、「厚生労動省慢性疼痛診療システム均てん化等事業」の一環として、痛みセンターとしての使命を果たすべく、少なくともこの事業の東北ブロックでこのような資源の活用法を広めていければよいと考えております。

今後とも皆様と共に学んでいければと考えておりますので、ご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

〔福島〕

慢性疼痛診療研修会　報告

星総合病院　慢性疼痛センター　二瓶　健司

令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業 東北ブロック
慢性疼痛治療ガイドライン研修会 in 郡山

日　　時：2024年1月28日（日）10：00～15：30　　会　　場：福島県看護会館みらい2階研修室（福島県郡山市本町）

内　　容：・ガイドライン概論：伊達　　久 先生（仙台ペインクリニック院長）
・薬物療法：上野　博司 先生（京都府立医科大学麻酔科学教室准教授）
・神経ブロック療法：渡邉　恵介 先生（奈良県立医科大学ペインセンター教授）
・リハビリテーション：松原　貴子 先生（神戸学院大学総合リハビリテーション学部理学療法学科教授）
・心理的アプローチ：細越　寛樹 先生（関西大学社会学部社会学科心理学専攻教授）
・慢性疼痛の看護：安藤　千晶 先生（東京都健康長寿医療センター研究所）
・グループディスカッション（4事例）

参 加 者：28名

職種内訳

職種	参加者数
医師	2名
歯科医師	2名
薬剤師	2名
看護師	7名
保健師	1名
理学療法士	11名
言語聴覚士	1名
心理士	1名
柔道整復師	1名

参加施設（五十音順）

（宮城県）	（福島県）
大泉記念病院	アート歯科
かねたバランス接骨院	池田記念病院
仙台ペインクリニック	奥羽大学
宮城県立がんセンター	かしま病院
みやぎ南部整形外科クリニック	合同会社ICE
	ししど整形外科クリニック
	半田整形外科
	ひらた中央病院
	福島県立医科大学会津医療センター
	福島県立医科大学保健科学部
	福島赤十字病院
	星総合病院
	三春病院
	薬局いずみ調剤

アンケート結果

1)研修会で役立ったこと

・ガイドラインの活用方法、薬物療法、運動療法の有用性、判断基準など。
・多職種でのケーススタディは、他職種の様々な意見が聞けて良かった。
・慢性疼痛の目標や治療などについて知ることができた。
・運動療法だけでなく様々な職種、アプローチ方法があることがわかった。
・地域の慢性疼痛の窓口などがわかった。
・外来での問診、指導に活かすことができそう。
・薬物投与や各アプローチのエビデンスがわかった。
・看護師という立場で自分にできることは何かを改めて学べた。
・慢性疼痛の看護についても講義を受けることができたこと。
・問診でより具体的に患者さんの背景がつかめるようになると感じた。
・痛みの原因や生活環境など情報を集めてアセスメントが大事ということ。

2)研修会の感想

・中身の濃い、充実した研修でした。多面的に学習できて、知見が広がった。
・リハビリテーションについて学びになった。(魚肉ソーセージ布教します!!)
・他業種の意見が聞けてよかった。特に午後のグループワークが楽しかった。
・患者さんを全人的にアセスメントできるよう経験を積んでいきたい。
・今まで参加してきた研修会の中で一番引き込まれ、先生達の熱量を感じた。

総括

慢性疼痛診療ガイドラインの作成に携わった先生を講師としてお招きし、ガイドラインに特化した研修会を開催しました。講師の先生からは、ガイドラインに掲載されている内容の目的や意図を説明していただき、Clinical Questionに対する解説文をしっかりと読み解く必要性を改めて実感することができました。グループディスカッションでは、様々な職種が参加したことで、多職種でのグループディスカッションとなり、他の職種の考え方を知る機会にもなりました。また、提示された事例は、臨床場面で遭遇しているようなシンプルなケースだったため、想像が膨らみやすく、盛り上がったディスカッションとなりました。事例検討に対する講師の先生からのコメントでは、すべての職種が共通して参考になるようアドバイスを頂けたことで、参加者の満足度もとても高かったようでした。今回のガイドライン研修会が、今後の慢性疼痛診療の臨床場面におけるアセスメントの一助となることを祈念するとともに、来年度以降の慢性疼痛診療研修会においても、ガイドラインのエッセンスを盛り込みながら、慢性疼痛診療の指針を周知していきたいと思います。

東北ブロック内の合同カンファランス開催報告

慢性疼痛診療システムの均てん化と東北ブロック内の慢性疼痛機関病院との連携強化を目的に、他医療機関と実際の症例を検討する合同カンファランスを4回開催したので、以下に報告する。

1）山形大学医学部附属病院疼痛緩和内科との合同カンファランス

日　　時：第1回2023年 7月 21日（金） 17：00～18：00（治療前）
第2回2023年10月27日（金） 17：00～18：00（治療後）

方　　法：Web会議システム（Zoom）によるオンライン開催

参　　加：星総合病院慢性疼痛センター
（整形外科医：髙橋直人・恩田啓・松平浩・矢吹省司、精神科医：笠原諭、看護師：本幸枝・古市晃礼、薬剤師：福地朋子・横田一樹、公認心理師：荒瀬洋子、管理栄養士：舘歩・金澤美香、理学療法士：二瓶健司・春山祐樹・三瓶拓磨・佐藤峻・皿良優介・野島勝輝・飛田理恵、作業療法士：谷津田尊寛、精神保健福祉士：髙槻梢）
山形大学医学部附属病院疼痛緩和内科
（麻酔科医：飯澤和恵氏、公認心理師：三道なぎさ氏）

内　　容：山形大学より紹介された慢性疼痛患者について、星総合病院で治療を行う前に第1回目のカンファランスを行い、これまでの山形大学での治療経過を共有した。星総合病院での入院型ペインマネジメントプログラム（3週間）を10月10日から10月27日に実施し、入院最終日の10月27日に第2回目のカンファランスを行った。第2回目のカンファランスでは、星総合病院での治療経過を共有し、今後の治療方針について双方の病院で協議した。

2）岩手医科大学附属病院麻酔科との合同カンファランス

日　　時：2023年11月24日（金） 17：00～18：00　　方　　法：集合開催（会場：星総合病院 会議室）

参　　加：星総合病院慢性疼痛センター（同上）
岩手医科大学附属病院麻酔科
（麻酔科医：大畑光彦氏、整形外科医：鈴木忠氏、看護師：高橋ユミ子氏、理学療法士：坪井宏幸氏、臨床心理士：藤原恵真氏）

内　　容：岩手医科大学より紹介された慢性疼痛患者について、星総合病院での入院型ペインマネジメントプログラム（3週間）を11月6日から11月24日に実施し、入院最終日の11月24日にカンファランスを行った。カンファランスでは、星総合病院での治療経過を共有し、今後の治療方針について双方の病院で協議した。

3）秋田大学医学部附属病院麻酔科との合同カンファランス

日　　時：2024年2月2日（金） 17：00～18：00　　方　　法：集合開催（会場：星総合病院 会議室）

参　　加：星総合病院慢性疼痛センター（同上）
秋田大学医学部附属病院麻酔科
（麻酔科医：山本夏子氏・今野俊宏氏・中島麻衣子氏）

内　　容：星総合病院での初診の慢性疼痛患者について、多職種によるアセスメントおよび治療方針についての協議を、秋田大学麻酔科医の先生を交えて、合同カンファランスを行った。

4）青森リハビリテーションスタッフとの合同カンファランス

日　　時：2024年2月16日（金）17：00～18：00　　方　　法：集合開催（会場：星総合病院 会議室）

参　　加：星総合病院慢性疼痛センター（同上）
八戸市立市民病院（理学療法士：石村慶太氏）
青森市民病院（理学療法士：平野望氏、作業療法士：美濃匠太朗氏）
青南病院（理学療法士：藤田智樹氏）

内　　容：星総合病院での初診の慢性疼痛患者について、多職種によるアセスメントおよび治療方針についての協議を、青森県のリハビリテーションスタッフを交えて、合同カンファランスを行った。

総括

実際の症例によるカンファランスを通して、他施設の専門職よりご意見を頂戴する貴重な機会となり、多くの刺激を受ける場となった。オンラインによる開催は、遠方でも気軽に行えるメリットがあるため、東北ブロック内の痛みセンターと繋がる機会が増えることが期待できる。また、福島県内の紹介元医療機関との連携にオンライン会議を活用することも検討していきたい。集合研修による対面でのカンファランスでは、お互いの情報や意見を交換しやすく、カンファランス後のちょっとした相談でも気兼ねなく行いやすいため、積極的に足を運びながら直接的な対話も重視したい。今後もカンファランスを定期的に開催し、症例検討や慢性疼痛に関する情報共有を行い、他の関係機関とのネットワーク構築に向けて進めていきたいと考える。

〔リハビリテーション職種による合同企画〕

令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業 東北ブロック
福島県・宮城県合同企画

リハビリテーション専門職のための慢性疼痛評価研修会

福島県コーディネーター 理学療法士 二瓶 健司
宮城県コーディネーター 理学療法士 大友 篤

はじめに

令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業として、福島県と宮城県の合同でリハビリテーション専門職のための研修会を企画し開催しました。

研修会の内容は、慢性疼痛患者の評価方法、評価技術の均てん化を目的に慢性疼痛の概論から多面的評価・治療について、そして近年痛みの感作の評価として注目されている定量的知覚検査(Quantitative Sensory Testing; QST)について講義と実技を行いました。QSTについては慢性疼痛の客観的評価法による疼痛の診断・評価法などの研究を行っている服部貴文先生に講義いただきました。

今回、東北ブロックリハビリテーション専門職を対象に開催した研修会の概要について以下に報告します。

研修会内容

1)日時:2023年11月12日(日) 10:00～15:00
2)会場:福島県立医科大学保健科学部 5階 理学療法評価室
3)参加者:15名
①職種別:PT 10名、OT 2名、ST 1名、理学療法学生2名)
②県別:青森県1名、福島県13名、宮城県1名
③講師・ファシリテーター:医師3名、PT 6名
4)研修内容
・慢性疼痛について(慢性疼痛とは/慢性疼痛の治療) 仙台ペインクリニック 麻酔科 伊藤 裕之 氏
・慢性疼痛評価の概論(痛みの多面的評価の必要性) 八戸市立市民病院 理学療法士 石村 慶太 氏
・慢性疼痛評価の各論(定量的知覚検査の概要と実技) 前原整形外科リハビリテーションクリニック 理学療法士 服部 貴文 氏

参加者のアンケート結果

1)満足度:満足(100%)
2)感想(自由記載):一部抜粋
・慢性的疼痛患者の疼痛評価・治療に参考となりました。
・痛みの訴えがある患者様に対して、より適切に高度なリハビリを提供できるように勉強するきっかけになりました。
・定量的な痛みの評価で、臨床で悩んでいたので、とても参考になりました。
・痛みを抱えた患者に対する対応の仕方や治療戦略の考え方の一助となりました。
・慢性疼痛の基礎的な部分からの理解が深められました。また、QSTの結果をどのように考えてその後の治療に関係させていくかがわかり勉強になりました。
・疼痛ひとつにとっても幅広い知識が必要だと実感しました。
・痛みの客観的な評価に活かします。

研修風景

おわりに

福島県と宮城県の合同企画として、痛みの評価の均てん化を目的にリハビリテーション職種に対して研修会を開催し、参加者の満足度は高く好評を得ました。しかし、今回の研修会は東北ブロックリハビリテーション職種を対象に痛みの評価の均てん化を目的に開催しましたが、参加者は県別にみるとほぼ全員が福島県内のリハビリテーション職種であったことや、参加者が定員を下回ったことが反省点です。今後は、各県で研修会を開催するなど、参加者を募り慢性疼痛診療の均てん化に向けた研修会を開催したいと思います。

学会発表等

学会発表等

厚生労働省慢性疼痛関連事業で行っている「地域連携」「多職種連携」、研修会による教育効果など、慢性疼痛診療事業に関わることで得た成果を学会にて発表し、情報提供することができた。本事業における令和5年度の業績は次の通りである。（※発表順に記載）次ページに抄録を掲載する。

1.一般口述：当院の慢性腰痛に対する治療成績と課題について
石村 慶太[1],盛島 幾子[1],風穴 愛貴[1],田中 直[2],沼沢 拓也[1,2]
[1]八戸市立市民病院リハビリテーション科,[2]八戸市立市民病院整形外科
第27回日本ペインリハビリテーション学会，2023年6月24－25日

2.一般口演：慢性疼痛診療研修会参加者における慢性疼痛診療困難感尺度の職種間の相違
本 幸枝[1], 髙橋 直人[1,2], 高槻 梢[2], 福地 朋子[1], 二瓶 健司[1], 矢吹 省司[1,2]
[1]星総合病院慢性疼痛センター ,[2]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
第16回日本運動器疼痛学会，2023年11月3－4日

3.一般口演：慢性疼痛診療研修会参加者に対する知識水準の検討
福地 朋子[1], 髙橋 直人[1,2],高槻 梢[2], 本 幸枝[1], 二瓶 健司[1], 矢吹 省司[1,2]
[1]星総合病院慢性疼痛センター ,[2]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
第16回日本運動器疼痛学会，2023年11月3－4日

4.一般ポスター：術後/外傷後慢性疼痛に対する集学的痛み治療中に介護事業所と連携し奏功した1例
春山 祐樹[1],髙橋 直人[1,2],二瓶 健司[1],荒瀬 洋子[1], 山口 歩[1], 本 幸枝[1], 矢吹 省司[1,2]
[1]星総合病院慢性疼痛センター ,[2]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
第16回日本運動器疼痛学会，2023年11月3－4日

5.一般ポスター：就労に支障があった慢性疼痛患者に対し新たな心理社会的フラッグシステムを用い外部資源活用が有用であった1例
髙橋 直人[1,2],松平 浩[1,2],高槻 梢[1],本 幸枝[2],二瓶 健司[2],谷津田 尊寛[2],津村 紀子[3],笠原 諭[1,2],矢吹 省司[1,2],井上 真輔[4]
[1]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座,[2]星総合病院慢性疼痛センター ,[3]福島産業保健総合支援センター ,[4]愛知医科大学医学部疼痛医学講座
第16回日本運動器疼痛学会，2023年11月3－4日

6.一般ポスター：集学的痛み治療とともに外部資源との連携により復職できた二次性筋骨格系慢性疼痛の1例
二瓶 健司[1],髙橋 直人[1,2],松平 浩[1,2],津村 紀子[3],服部 彩乃[1],本 幸枝[1],荒瀬 洋子[1],矢吹 省司[1,2]
[1]星総合病院慢性疼痛センター ,[2]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座,[3]福島産業保健総合支援センター
第16回日本運動器疼痛学会，2023年11月3－4日

7.一般口演：慢性疼痛診療システムの構築に向けた東北地区における痛みセンターと拠点病院の連携
髙橋 直人[1,2],高槻 梢[1],笠原 諭[1,2],松平 浩[1,2],矢吹 省司[1,2]
[1]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座,[2]星総合病院慢性疼痛センター
第33回日本腰痛学会，2023年12月1－2日

8.一般ポスター：慢性腰痛患者に対する理学療法の治療成績
石村 慶太[1],盛島 幾子[1],風穴 愛貴[1],田中 直[2],沼沢 拓也[1,2]
[1]八戸市立市民病院リハビリテーション科,[2]八戸市立市民病院整形外科
第33回日本腰痛学会，2023年12月1－2日

9.シンポジウム：令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業シンポジウム青森県での取り組み
沼沢 拓也
八戸市立市民病院整形外科
第45回日本疼痛学会，2023年12月9日

10.シンポジウム：令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業シンポジウム福島県での取り組み－地域全体で補完できる集学的痛み治療の実現を目指した取り組み－
二瓶 健司[1,2],髙橋 直人[1,2],松平 浩[1,2],笠原 諭[1,2], 本 幸枝[1],福地 朋子[1],高槻 梢[2],矢吹 省司[1,2]
[1]星総合病院慢性疼痛センター ,[2]福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
第45回日本疼痛学会，2023年12月9日

第27回日本ペインリハビリテーション学会

◎一般口述

タイトル：当院の慢性腰痛に対する治療成績と課題について

石村慶太[1)]　盛島幾子[1)]　風穴愛貴[1)]　田中　直[2)]
沼沢拓也[1) 2)]
1）八戸市立市民病院リハビリテーション科
2）八戸市立市民病院整形外科

キーワード：治療成績、HADS、地域連携

【緒言】

当院では2020年より慢性腰痛の外来リハを開始し、リハ提供期間は3か月を目安にしている。今回、当院の慢性腰痛患者の治療成績を示し、課題と新たな試みを報告する。

【方法】

2020年4月～ 2022年12月までに当院整形外科外来を受診し、画像所見を含む各種検査結果から慢性腰痛と診断された3か月以上腰痛・下肢痛が継続する29名（年齢57.9±18.1歳、男10名、女19名）を対象とした。外来リハ期間は85.3±31.8日であり、週1回の2 ～ 3単位で運動療法を提供し、姿勢や生活指導、体幹筋力トレーニング、活動量管理を共通して実施した。治療成績は①PCS②PSEQ③PDAS④HADS-A⑤HADS-D⑥EQ5D5L、JOABPEQの5つのドメイン（⑦疼痛⑧腰椎⑨歩行⑩社会⑪心理）とVAS（⑫腰痛⑬下肢痛⑭しびれ）の全14項目とし、リハ前後でWilcoxon符合付順位和検定を用いて比較した。

【結果】

④・⑤を除くすべての項目で統計学的有意差を認めた（P＜0.01）。①・③・⑫～⑭は有意な減少を、②・⑥・⑦～⑪は優位な増加を認めた。

【考察】

薬剤処方に加え外来リハにより、当院で治療する慢性腰痛患者の疼痛改善が示されたが、不安・抑うつに関しては改善が得られにくいことが課題となった。現在、HADSスコアの改善が得られずに腰痛が遷延する症例を近隣のペインクリニックや精神・心療内科に紹介し、麻酔科医や精神科医、心理士を交えて地域で集学的アプローチを行う取り組み（八戸モデル）を発展させようとしている。

第16回日本運動器疼痛学会

◎一般口演

題名：慢性疼痛診療研修会参加者における慢性疼痛診療困難感尺度の職種間の相違

本　幸枝[1)]　髙橋直人[1) 2)]　高槻　梢[2)]　福地朋子[1)]
二瓶健司[1)]　矢吹省司[1) 2)]
1）星総合病院慢性疼痛センター
2）福島県立医科大学医学部疼痛医学講座

今年度より取り組んでいる慢性疼痛診療均てん化等事業として、これまでに開催した人材養成モデル事業研修受講者を対象に、慢性痛の診療やケアに関する困難感について職種間の相違を分析した。分析対象は、東北ブロックの慢性疼痛研修会参加者167名のうち、欠測値のある者を除いた93名とした。職種内訳は、医師29名、歯科医師10名、理学療法士27名、看護師13名、作業療法士4名、臨床心理士4名、柔道整復師3名、薬剤師2名、精神保健福祉士1名であった。困難感の指標には、厚労省政策研究班で慢性痛治療の普及を目的に開発された地域介入評価尺度の「困難感尺度」を用いた。分析方法は、研修会参加者を医師と歯科医師を医師群（39名）、医師群以外をメディカルスタッフ群（54名）とし、困難感尺度の合計得点を対応のないt検定で比較した。また、困難感尺度の各項目をカイ二乗検定で分析した。合計点の平均値±標準偏差は、医師群が61.7±18.9、メディカルスタッフ群が66.5±16.2で、有意差を認めなかった。しかし、項目別にみると「多職種間の慢性痛評価が一致していない」（p=0.004）と「多職種間の心理社会的要因のディスカッション」（p=0.021）で有意差を認め、医師群に比べメディカルスタッフ群で困難と感じている者が有意に多かった。今回の結果から、今後の研修では、多職種でのグループワークなど多職種間のコミュニケーションの機会を増やしていくことで、この差を埋めていく必要があると思われる。

第16回日本運動器疼痛学会

◎一般口演

題名：慢性疼痛診療研修会参加者に対する知識水準の検討

福地朋子[1)] 髙橋直人[1) 2)] 高槻　梢[2)] 本　幸枝[1)]
二瓶健司[1)] 矢吹省司[1) 2)]
1)星総合病院慢性疼痛センター
2)福島県立医科大学医学部疼痛医学講座

今年度より取り組んでいる慢性疼痛診療均てん化等事業として、これまでに開催した厚生労働省の人材養成モデル事業研修受講者を対象に、研修前後の慢性疼痛に関する知識水準を分析した。分析対象は、東北ブロックの慢性疼痛診療研修会参加者で回答を得た167名のうち、回答データが揃っている77名とした。職種内訳は、医師28名、歯科医師5名、看護師7名、薬剤師3名、理学療法士23名、作業療法士4名、臨床心理士2名、精神保健福祉士2名、柔道整復師2名、臨床検査技師1名であった。知識の指標には、厚労省政策研究班で慢性痛治療の普及を目的に開発された地域介入評価尺度の「知識尺度」を用いた。分析方法は、研修前後の各群における知識尺度をMcNemar検定で比較した。また、研修会参加者を医師と歯科医師を医師群（33名）、医師群以外をメディカルスタッフ群（44名）とし、2群間の研修後の知識尺度をカイ二乗検定で比較した。研修前後で有意差を認めたのは、ICD-11、構造化問診、red flag、NSAIDs、オピオイド鎮痛薬、強オピオイドに関する6項目（$p < 0.05$）で、研修後に正答者の増加を示した。研修後で両群に有意差を認めたのは、二次性頭痛、構造化問診、NSAIDsに関する3項目（$p < 0.01$）で、メディカルスタッフ群に比べ医師群の正答者が多かった。研修会の開催により、慢性痛の分類や薬物療法に関する知識が深まった一方で、職種間の差が認められたため、今後の研修会企画に役立てていきたいと考える。

◎一般ポスター

術後/外傷後慢性疼痛に対する集学的痛み治療中に介護事業所と連携し奏功した1例

春山祐樹[1)] 髙橋直人[1) 2)] 二瓶健司[1)] 荒瀬洋子[1)]
山口　歩[1)] 本　幸枝[1)] 矢吹省司[1) 2)]
1)星総合病院慢性疼痛センター
2)福島県立医科大学医学部疼痛医学講座

介護保険通所介護利用中の術後/外傷後慢性疼痛患者に対して、介護事業所との連携を試み奏功した1例を経験したので報告する。症例は70代女性で、診断名は左下腿骨折術後である。既往にパーキンソン病があり、現在も通院加療中である。当院初診4年前にバイク事故で転倒し受傷した。他院で左下腿骨折に対しイリザロフ創外固定術が施行されている。骨癒合後は全荷重が許可されているものの残存痛と荷重への恐怖感により歩行を避けるようになり、臥床時間が増加した。家族の過保護も重なり身体活動量が低下し日常生活動作が著しく損なわれた。本症例に対し多職種連携集学的痛み治療を行った。その中で理学療法士は杖歩行の再獲得と生活機能改善を目標に体幹の柔軟運動、左足関節背屈可動域訓練や荷重訓練、活動量漸増への運動療法および生活動作指導による3ヶ月間の外来理学療法を実施した。その内容を家族と介護支援専門員に適宜伝達し、介護サービス事業所内でも共有した。治療3ヶ月後には屋内杖歩行が自立し、NRSは下肢痛が8から6、腰痛が8から5、PDASが55から31、PSEQが3から18へと改善した。集学的痛み治療のみならず外部の介護事業所と情報を共有できたこともあり、患者本人や家族の不安軽減と意欲向上が図られた可能性を考えた。活動性が低下した高齢の慢性疼痛患者の在宅生活を保持するためには家族や介護事業所との密な連携も重要であると考えられる。

第16回日本運動器疼痛学会

◎一般ポスター

就労に支障があった慢性疼痛患者に対し新たな心理社会的フラッグシステムを用い外部資源活用が有用であった1例

髙橋直人[1)2)] 松平　浩[1)2)] 高槻　梢[1)] 本　幸枝[2)]
二瓶健司[2)] 谷津田尊寛[2)] 津村紀子[3)] 笠原　諭[1)2)]
矢吹省司[1)2)] 井上真輔[4)]
1)福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
2)星総合病院慢性疼痛センター
3)福島産業保健総合支援センター
4)愛知医科大学医学部疼痛医学講座

就労に支障をきたしている慢性疼痛患者には社会的支援が必要不可欠である。休業や生産性低下をきたす筋骨格系疼痛に対しその要因や問題点を的確に評価するための「心理社会的フラッグシステム」が世界の有識者による会議を経て英国で開発され、欧州では各国のガイドラインで推奨されている。我々は本邦の実情に合わせた新たな心理社会的フラッグシステムを開発した。この新フラッグシステムの中にてブルーフラッグを「仕事と治療の両立支援」、ブラックフラッグを「就労支援」と定義している。「仕事と治療の両立支援」の有用な外部資源として、星総合病院慢性疼痛センターでは全国に先駆けて福島産業保健総合支援センターとの連携を開始した。この外部資源を活用することにより就労復帰した1例を報告する。症例は47歳男性で、主訴は腰痛であった。多職種での多面的な疼痛評価を行った後に集学的痛み治療を施行した。その結果痛みの程度、心理社会的因子およびQOLの改善が認められた。その際外部資源とのネットワークを活用することで企業への介入が可能となり就労復帰まで円滑に進めることができた。痛みセンターと外部資源が緊密に連携するシステムを構築することは、痛みがあっても仕事や生活ができるという目的を達成する上で重要であると思われる。

◎一般ポスター

集学的痛み治療とともに外部資源との連携により復職できた二次性筋骨格系慢性疼痛の1例

二瓶健司[1)] 髙橋直人[1)2)] 松平　浩[1)2)] 津村紀子[3)]
服部彩乃[1)] 本　幸枝[1)] 荒瀬洋子[1)] 矢吹省司[1)2)]
1)星総合病院慢性疼痛センター
2)福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
3)福島産業保健総合支援センター

復職に難渋した二次性筋骨格系慢性疼痛症例に対して、産業保健総合支援センター（以下、支援センター）を利用したことで復職に結びついた症例を経験したので報告する。症例は50代女性で、左手三角線維軟骨複合体損傷による尺骨短縮術後5ヶ月であった。初診時の主訴は、創部周囲の左前腕部痛、左肩関節痛、右上腕部痛、腰痛で、左前腕回外0度、左握力11kgであった。術後の二次性筋骨格系慢性疼痛と診断し理学療法、作業療法および心理療法を中心とした集学的痛み治療を3ヶ月間施行した。その結果、左前腕回外70度と改善し、左手の使用頻度も増加した。手を酷使する仕事への復帰には職場の理解が必要不可欠であると考えたため、支援センターの協力を得ることにした。支援センターからは、勤務先に向けたリハビリテーション報告書の作成が提案され、当センターの担当療法士が作成した。内容は、本症例が作業に復帰するにあたり困難としている動作や姿勢、許容できる作業とした。その報告書を参考に支援センターと企業側で復帰支援を計画し、職場内での配置転換と労働時間の調整などの配慮がなされ、復職を果たすことができた。集学的痛み治療のみならず支援センターなどの外部資源との連携により、慢性疼痛患者の社会復帰を推進しやすくなると考えられる。

第33回日本腰痛学会

◎一般口演

題名：慢性疼痛診療システムの構築に向けた東北地区における痛みセンターと拠点病院の連携

髙橋直人[1) 2)]　高槻　梢[1)]　笠原　諭[1) 2)]　松平　浩[1) 2)]
矢吹省司[1) 2)]
1）福島県立医科大学医学部疼痛医学講座
2）星総合病院慢性疼痛センター

全国8地区で「厚労省慢性疼痛診療システム均てん化等事業」が展開されている。この事業は、痛みセンターを拠点とした診療システムを構築するとともに、診療レベルの均てん化を目指す事業である。東北地区には、現在、福島県立医科大学附属病院、星総合病院、仙台ペインクリニックの3つの痛みセンターがあり、慢性疼痛患者に対して多職種連携集学的痛み診療を行っている。慢性疼痛診療システムの普及を目指して、東北地区では3つの痛みセンターを中心に東北6県の各県における拠点病院と連携して診療ネットワークの構築に努めている。

この診療ネットワークを活用することにより、効果的な治療を行い得た1症例を報告する。症例は42歳の女性で、主訴は腰痛、左鼠径部痛、下腿外側の痛みとしびれ、および重苦感である。当院初診の約2年半前より誘因なく主訴が出現した。腰椎椎間板ヘルニア（L4/5）の診断で、内視鏡下椎弓切除術（左L4/5）と全内視鏡下椎間板摘出術（L4/5）の2回の手術が施行された。術後症状は軽度改善するも残存したため、リハビリテーションを専門とする病院に転医し、治療が継続された。しかし、徐々に疼痛が増悪し、ADLでの困難を感じるようになった。同院での治療の限界と判断され、星総合病院慢性疼痛センターに紹介となり初診した。多職種による多面的な疼痛評価を行い、入院ペインマネジメントプログラムによる集学的痛み治療を施行した。慢性疼痛センターでの治療により痛みの程度、心理社会的因子、およびQOLの改善が認められた。　退院後は紹介元に戻り、経過観察を継続している。本症例は、痛みセンターとの診療ネットワークを活用することで有効な治療を行うことができた。施設見学や合同カンファランスを行い、緊密な診療連携システムを構築することは、慢性疼痛診療では重要であると思われる。

◎一般ポスター

慢性腰痛患者に対する理学療法の治療成績

石村慶太[1)]　盛島幾子[1)]　風穴愛貴[1)]　田中　直[2)]
沼沢拓也[1) 2)]
1）八戸市立市民病院リハビリテーション科
2）八戸市立市民病院整形外科

キーワード：慢性腰痛、姿勢、理学療法

【目的】

当院では2020年より慢性腰痛患者に対する通院リハビリテーションを開始した。今回、慢性腰痛患者に対するリハビリ前後の脊柱アライメントの変化および、慢性疼痛診療で一般に用いられる質問票により評価した治療成績を報告する。

【方法】

2020年4月～2022年12月までに当院整形外科外来を受診し、慢性腰痛と診断された18名（年齢62.9±15.1歳、男4名、女14名）を対象とした。薬物療法に加え、週1回の2～3単位の理学療法を約3か月間提供した。理学療法の内容は松平氏によるACEコンセプトに加え、脊椎アライメントに着目した姿勢指導を提供した。姿勢指導はA)殿筋群と腹筋群の収縮、B)腰椎の生理的前彎を得るための腰椎前後彎の調整、C)後方重心の是正をポイントとして、歩行開始前の矢状面での立位姿勢の改善を目標に1回のリハビリ時間内で15分程度行った。質問票内容は1）PCS 2）PSEQ 3）PDAS 4）HADS-A 5）HADS-D 6）EQ5D5L 7)腰痛VAS 8)下肢痛VAS 9)しびれVASである。画像評価はリハビリ開始前と終了時にそれぞれ撮影した立位X線側面像にて、10）SS 11）PT 12）PI 13）CL 14）TK 15）LL 16）SVAを測定した。統計解析は、1）～16)のリハビリ前後の結果についてWilcoxonの符号付順位検定を行い、有意水準は0.05とした。

【結果】

リハビリ介入前後で、1）•3)、7）～9)は有意な減少を、2）•6)は有意な増加を認めたが、その他については有意差を認めなかった。

【考察】

リハビリ前後で脊柱アライメントを明らかに変化させることはできなかったが、薬物療法や松平氏のACEコンセプトに加え、歩行前の立位姿勢に行った姿勢指導は慢性腰痛患者の破局的思考、自己効力感、ADL、QOLを有意に改善することがわかった。慢性疼痛診療ガイドラインにおいて、姿勢変化や姿勢改善に対するエビデンスが不十分だが、実臨床では姿勢変化により疼痛軽減に至る症例を経験する。姿勢に着目した運動療法の有効性を示すために引き続き調査していく。

第45回日本疼痛学会

◎シンポジウム

令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業シンポジウム青森県での取り組み

Regional activity for chronic pain treatment in Aomori prefecture

八戸市立市民病院整形外科　沼沢拓也

Department of Orthopedic Surgery, Hachinohe City Hospital

Takuya Numasawa

2017年より厚生労働省が慢性疼痛診療システムの構築に関するモデル事業を全国へ展開し、東北ブロックにおいても多職種を対象に慢性疼痛に関わる講演会や研修会が開催されてきました。この事業では慢性疼痛診療のセンターを設置し、治療の集約化により高い治療効果を達成することを目標としておりました。演者は東北ブロック事業の青森県担当の機会を頂きましたが、青森県八戸市は地域の中核都市ではありますが、大学病院のある弘前市や岩手県盛岡市までは遠く、集約型の慢性疼痛診療体制の構築に難しさを感じていました。運動器慢性疼痛診療には、整形外科や麻酔科、精神科が関わり、またリハビリ技師や臨床心理士など多職種が関わる機会が多いため、当地域では2018年より上記3科医師と共に疼痛に関するミーティング「八戸ペインミーティング」を定期的に開催してきました。会では最新の知識の講演聴講に加え、毎回症例検討会を開催して情報交換を行い、地域の慢性疼痛患者への対応を一緒に考え、診療連携を試みてきました。本発表では、これまでの青森県での活動内容の報告と我々の地域で行ってきた活動について「八戸モデル」として紹介したいと思います。また当院の慢性疼痛診療についても紹介し、慢性疼痛診療の均てん化に向けた動きについて考えていきたいと思います。

◎シンポジウム

令和5年度慢性疼痛診療システム均てん化等事業シンポジウム福島県での取り組み

題名：地域全体で補完できる集学的痛み治療の実現を目指した取り組み

Efforts to achieve multidisciplinary pain treatment that can be complemented by the entire community

二瓶健司[1) 2)]　Kenji Nihei

髙橋直人[1) 2)]　Naoto Takahashi

松平　浩[1) 2)]　Ko Matsudaira

笠原　諭[1) 2)]　Satoshi Kasahara

本　幸枝[1)]　Yukie Moto

福地朋子[1)]　Tomoko Fukuchi

高槻　梢[2)]　Kozue Takatsuki

矢吹省司[1) 2)]　Shoji Yabuki

1)星総合病院慢性疼痛センター

2)福島県立医科大学医学部疼痛医学講座

慢性疼痛診療においては、正確な病態把握のために詳細な問診や検査が必要であり、慢性疼痛患者の生活の質の向上を目的とした治療が求められる。福島県では、慢性疼痛の診療技術の均てん化を目的とした研修会や講演会の企画、復職及び就労支援に関係する機関との連携強化、他医療機関との合同カンファランスを行ってきた。研修会は、多職種による研修会やリハビリテーション専門職を対象とした研修会、動機づけ面接法の講演会、定量的知覚検査の実技を含めた研修会を企画した。復職及び就労支援については、福島産業保健総合支援センターの保健師やハローワークの就職支援ナビゲーターとの関係性構築により、慢性疼痛患者の直接的な支援を実現することができた。他医療機関との合同カンファレンスでは、実際の紹介患者の治療や経過報告などを対面またはWeb会議システムで開催した。地域のネットワークが築かれつつある一方で、「多職種間の慢性疼痛評価が一致していないと感じている」、「多職種間の心理社会的要因のディスカッションで困難さを感じている」、といった意見がメディカルスタッフで多かった。今後、グループワークなどで多職種間のコミュニケーションの機会を増やす方策を検討していきたい。あらゆる社会資源の活用と医療機関の相互連携により、地域全体で補完できる集学的痛み治療の実現を目指して、慢性疼痛診療システムの均てん化を進めていきたいと考える。

編集後記

コロナに振り回された数年間でしたが、2023年度後半には、対面でも何とか本慢性疼痛診療システム均てん化等事業を行うことができるような状況になってきて、この報告書を作成できたことを嬉しく思っております。

今年度も、各県の幹事が中心となってこのモデル事業を推進してきました。この報告書を読むと各県の特徴がわかると思います。各県の幹事の皆様、本当にご苦労様でした。また、本事業に関わってくださった皆様、ありがとうございました。

この事業は来年度も引き続き行われる予定です。来年度は、年度当初から皆さんと慢性疼痛診療についてじっくりと顔を見ながら語り合いたいと思います。よろしくお願いします。

福島県立医科大学疼痛医学講座
教授　矢吹省司

公立大学法人福島県立医科大学医学部
疼痛医学講座

〒960-1295　福島市光が丘 1 番地
TEL&FAX 024-547-1987

編集・印刷：タカラ印刷株式会社